
ものぐさな賢者 幼少編

クロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ものぐさな賢者 幼少編

【Nコード】

N6788X

【作者名】

クロコ

【あらすじ】

『龍玉』。それは人族やエルフ族、獣人族など様々な種族が住む、龍神が創ったとされる世界。オクトはその世界で『混ぜモノ』と呼ばれる忌み嫌われた存在だった。

異世界だけど前世の知識を持つオクトが、その知識を使って平穏に生きる為に努力する話です。

序章

「いやああああああ」

甲高い叫び声を聞いて、私の意識は覚醒した。

その声は何処までも悲痛で、ただただ悲しいと訴える。この声が聞こえるまではずっと私の意識はふわふわとしていて、まるで夢を見ているようだった。頭は霞がかり、苦しみも悲しみもなにもなかった為、こんな激しい感情が生まれたのは初めてだった。……いや、本当に初めてか？

以前もこんな感じで絶望した事なかっただろうか。一気にその声に引つ張られる形で目が覚めた私は、色んな事を忘れてしまっている気がして混乱した。

そもそもここは何処で、自分は――。

「オクト、どうしたんだ?!」

部屋の中へ、黒髪の男の子が飛び込んできた。

ああ、そうだ。彼は自分の兄のような存在のクロだ。そして自分は、オクトだ。

「オクト。だいじょうぶか？オクト、しっかりしろ。オクトっ!!」
クロに肩を掴まれ揺さぶられると、悲痛な悲鳴は止まった。……
違う。悲鳴の出所は、自分だ。止まったんじゃなく、止めたのだ。
「ク、クロっ!!」

ぶわつと浮かぶ涙の所為で、クロの顔が歪んだ。

さっきまで確かに苦しみも悲しみもない世界にいたのに、今は寂しくて仕方がなかった。感情の赴くままに小さなクロの体にしがみつく。そうでもしなければ、自分が壊れてしまいそうだった。

「クロ……クロっ……クロお……」

「いつからオレの名前言えるように……。そんなことより、どうしたんだよ。そんなに泣いて」

分らない。

ただ悲しくて、悲しくて仕方がなかった。軽いパニックを起こしている私には、ただ泣くことしかできなかった。

「ノエルさんはどこいったんだよ。オクトがこんなたいへんなのに」
ノエルさん……。

ふとそれが、自分の母親を示す名前だと分かった。それと同時に、何故こんなに悲しいのか思い出す。ふわふわと眠っていたはずなのに、自分の中にはちゃんと答えが詰まっていた。

「クロっ……。きえたの。ママがきえたの」

それは自分を捨てたとか、そういう意味ではない。文字通りこの世から消えたのだ。もう二度と会う事はない。それを本能的に私は知っていた。

「クロっ、クロっ……。あああああぁっ!!」

苦しくて、悲しくて、寂しくて。それが痛くて仕方がない。背中をさするクロにしがみつき、力の限り泣き続けた。

こうして私は母親の死と引き換えに、この世界に産まれ落ちた。

1 - 1 話 現状把握中な異世界人？

この世界は、龍神が作られた世界だ。名前を『龍玉』と呼ぶ。意味は龍の宝…… まんまだ。

そしてこの世界はいまだにそんな神話が生きており、生き神が住んでいるらしい。らしいというのは、一般庶民は神様にあう事が出来ないからだ。会えるのは王族のみ。一般庶民がもしも願い事があるならば、神殿に行く必要があるそうだ。

自分という意識がはつきりしてから、私はずっと情報を求めた。そうでなければ狂ってしまいそうなほどに私は混乱し、知識に飢えていた。そしてさまざまな情報を聞いていくうちに自分の中にある仮定ができた。

「私って、もしかして前世が異世界人なんじゃ……」

確かに私にはオクトとしての数年間の記憶はある。母親と一緒に旅芸人の一座に身を置いており、時折見世物として舞台に立ち歌ったりしていた。夢見心地で少し頼りない記憶だが、間違いなく自分のものだ。

それと一緒に、今は別の記憶が私には存在した。その記憶の持ち主がどんな人物だったのかは分からないけれど、オクトでは知りえない膨大な記憶で、私の人格は確かにその記憶がもとに形成されているように思う。逆にいえばオクトの記憶だけでは人格形成が出来ると思えないほど、経験も知識も何も詰まっていなかった。

オクトではない方の記憶では『日本』と呼ばれた国に住んでいた。子供は皆学校へ通うようで、私もまたそこに通っていたらしい。この世界ではほとんどの国が、金と才能がなければ学校に通えないのだから、そこからまず大きな違いだ。また日本ではあまり宗教は信

じられていなかったように思う。少なくとも一神教な国ではなかった。

もしかしたら私が知らないだけでこの世界のどこかにある国なのかもしれない。最初はそう考えもみた。それでもなお異世界ではないかと思つた決め手は、日本には『人族』しか知的生命体は存在しない事だ。

「その知識で行くと、自分を全否定だもんなあ」

龍玉には、『人族』を含め、様々な種族が住んでいる。大きな割合を占めているのは、『エルフ族』、『獣人族』、『翼族』、『魔族』、『精霊族』だ。ただし獣人族は中でもさらに細かく分類される上、少数民族は星の数だ。

そして私は『人族』と『エルフ族』と『獣人族』と『精霊族』の血を持つた『混ぜモノ』と呼ばれる存在だった。『混ぜモノ』は2種以上の血が混血したものであり、忌み嫌われる存在だったりする。というのも、種族が違えば成長も違うわけで、『混ぜモノ』はどう成長するか分からないからだ。

初めて聞かされた時は、何だそれ。生まれは選べないしいきなり迫害って酷くない？と思つた。どうやら日本という国は身分というものがほぼない状態で、迫害というものは悪として認識されていたようだ。しかしよくよく理由を聞くと、嫌われる理由がよく分かつた。『混ぜモノ』は成長度合いも寿命も知能も魔力も未知数なのだ。つまり産まれて一週間で成長きり死んでしまう例もあれば、百年たつても赤子のままでその後いきなり成長したということもある。魔力や知能が異常に高い事もあれば、その逆もある。今まで普通だったのに、いきなり老化スピードが上がったりと、予測がつかない爆弾みたいな存在なのだ。

異常な成長は病気ではないので他人にうつつたりはしない。しかし日本ほど治安が良くなく、必ず子供が成人できるとは限らないこ

の世界では、次世代に残すべきではない血なのだ。だから忌み嫌われる。

私の場合は、どうやら体は『人族』のスピードで成長したが、知能の方はいつまでも赤子と大差なかったらしい。まともに言葉を話す事も出来なければ、日常生活もままならないレベルだったそうだ。それが突然一か月前に『精霊族』と『獣人族』のハーフだった母親の死をきっかけに、知能および精神が急激に成長したのだ。それも成長度合いが今度は肉体を追い越しているのだから、他人からしたら気味が悪いだろう。忌み嫌われるのは、理解できないからという事も含まれるのかもしれない。

それでも今私が死んでいないという事は、『混ぜモノ』だろうと殺してはいけないという倫理がこの世界にも存在するらしい。

「かといって、今更演技してもなあ」

日本人は空気を読むのが上手い。空気の読めない人をKYなんて呼ぶ単語ができるほどに普通のスキルだ。しかし状況が分からない状態ではその能力の発動は無理だった。結果、私は旅芸人一座の間からも少し浮いてしまった状態である。

今更子供ぶったところで、余計に気味悪がられるだけだろう。かといって逆にペラペラと年相応ではない言葉をしゃべっても気味悪がられそうなので、今のところ無口キャラで通している。

では今後楽に生きるにはどうしたらいいのだろう。そこで将来的に迫害されない為、『混ぜモノ』であることを隠しておけばいいんじゃないかと考えた。しかし現実はそのなに甘くはなかった。『混ぜモノ』には大きな特徴として、顔にあざがあるのだ。かく言う私は、目じりに隈のようなあざがあり、それがばっちり身分証になっている。

隠すためにはお面をかぶるか、フードで顔を隠すしかない。その格好を想像してみたのだが、……混ぜモノでなくても気味悪がられそうなぐらい怪しい。

本気で生きにくい世の中だ。しょっぱすぎる。少しぐらいグレてもいいレベルだと思う。

「オクト、だんちよーがあそんできていいって」

そんな中でも、私を恐れない子供が一人いた。しかも精神が異常に成長してしまった今でも、年齢的には僅かに年上であろう彼は、私を妹のように扱う。

「クロ」

テントの外から顔をのぞかせたクロは私を見るとぱっと笑顔になり駆け寄ってきた。ちなみに今の私を普通の子供のように扱うのは、彼の母親と団長だけである。まったくもって希少価値の高い子供だ。「きょうはビラくれば、あとはあそんでもいいんだって。オクト、いこう？」

につこりと邪気のない笑顔で私の手をつかむと、クロはずんずんとテントの外に進もうとする。

「クロ、待つて。まだナイフ磨けてない」

この一座に身を置く為には働くしかない。今までは母親が働き、自分は舞台で見世物になっていればよかったのだが、母親が居なくなった今、雑務などをしなければ置いてもらえそうもなかった。『混ぜモノ』は確かに珍しいが、世の中にいないわけではないので到底目玉にはなれない。

とにかく使える人材だとアピールが必要だった。

そんなわけで、私は現状把握しながら、団員の道具の手入れを日々行っていたりする。

「そんなの、アイリスのしごとだろ。オクトがやるひつようないよ。母さん、じぶんのしょうばいどうぐをちゃんとかたづけられないのは、プロしっかくって言ってたよ」

「駄目」

私はきっぱりというと首を振った。確かにそうかもしれないが、

頼まれたものを放棄すれば、今後どんな嫌がらせを受けるか分からない。あいにくと私は格闘技のプロでもなければ、暗殺スキルとかも持っていないイタイゲな子供だ。殴られれば、本気で死にかなない。

そこで異世界とはいえ、前世の記憶を持ち合わせている自分が考えたうえでの結論は。

「長いものには巻かれた方が安全」

「ながい……まかれる？」

繰り返すクロに私は頷いた。

特に大きな害でないならば、甘んじておいた方が今後の為だ。上手い事動きまわれば、とりあえずは痛い事もないし、最低限の人権は守られるだろう。

「よくわかんないけど、ならオレもてつだうよ」

ぺちよりと地べたに座り込むと、クロは私が使っていた布を取り上げ、刃を磨き始めた。小さな子供に手伝いをさせて、万が一刃物で怪我をされては困るのだが、クロは結構頑固だ。一度決めたらたから終わるまでずっと手伝うだろう。

「ありがとう」

「おれがおにいちんだから、オクトをまもるのはあたりまえなんだよ」

気にするなと、小さな手で私の頭をわしわしとかき混ぜる。これは彼の母親がよくやる行動なので、彼なりの愛情表現なのだが、私の髪の毛はぐちゃぐちゃになった。ちよつと有難迷惑だ。

私もさつさと終わらせる為に、切れ味が悪くなっているナイフだけをオイルをかけた砥石で研ぐ。この方法は前世の知識にはなかったので、アイリスに一通り教えてもらったものだ。赤ん坊から脱出したばかりの脳は簡単にその技術を吸収してくれた。

ありがたいけれど、……自分って結構器用貧乏かもしれない。

「できた」

最後の一本についたオイルを綺麗にふき取って、道具箱にしまうと、私は額の汗を服の袖で拭った。子供の力だと、この程度でも結構重労働だ。

「よし。じゃあ母さんのところに、行くぞ」

何で？

確かビラを配りに行くんじゃないかなかっただろうか。首をかしげると、クロは私の腕を掴んで立たせた。

「そんなよごれたなりだと、この町のれんちゅうになめられるだろうほど。」

確かに、私もクロも汚れてしまった。クロは私の手を握り今度こそテントから外へ向かった。

1 - 2 話

私が身を寄せている旅芸人一座は、テントを張って生活する。さつき私がいた場所は道具がしまつてある物置のような場所だ。

寝る場所は下っ端は基本一つの大きなテントで雑魚寝だが、一座の中でも稼ぎ頭たちは小さいながらも自分の部屋をもらえる。もしくは都会で実入りがいい時は、稼ぎ頭たちだけは宿に泊まっていた。そしてクロのお母さんは剣の達人で剣舞踊や模擬戦などが好評の稼ぎ頭だった。私は本来雑魚寝なのだが、クロのお母さんが自分のママと友達だった為、一緒に部屋に置いてもらっていた。

「母さん、よごれた。たおるない？」

「あら。派手に汚したわね。クロは上着も着替えちゃいなさい。」

オクトは、とりあえず顔洗うだけでいいわね」

「すみません」

部屋には黒髪の女性がいた。仕事道具である剣を磨いてたらしい女性はクロを見ると笑みを浮かべた。目元がきつめの美女だが、笑うと少し可愛らしい。クロに続いて部屋に入った、私は頭を下げた。

「これはオレらがわるいんじゃないんだからな。アイリスのやつが、オクトにしごとをおしつけるからいけないんだ」

「違う」

私はクロの後ろで首を横に振った。

私は基本雑用係だ。仕事道具を片づけるのも仕事である。まあナイフを研ぐまでやるのはやり過ぎというか、やらせ過ぎかもしれないが、依頼があつたのなら仕方がない。

それに仕事があるから私はここに置いてもらえている。ならばアイリスを恨むのはお門違いだ。

「ちがわない。オクトは人がよすぎるんだ」

「それも違う」

「はいはい。分かったから、喧嘩は後にしてクロは早く着替えなさい。濡れタオルは母さんが用意しておいてあげるから。それと、オクト。今のアイリスじゃそんなに売れっ子にはなれないから、媚売ってもしかたないわよ。売るなら、もっと上の人に売るか青田買いをしなさい」

それもどうなんだろう。

私は困ったように首をかしげた。そもそも私をいじめたりしそうなのは、アイリスみたいな中途半端なレベルの人だ。売れっ子は逆にアイリス辺りをこき使う。なのでアイリスの不興を買わないのは対策としてはあっていると思う。

確かに売れっ子のお気に入りになれば、うかつに手は出せないだろうけど。

しかし売れっ子の役に立てるような事が今の私にできるとは思えない。もう少し大きくなれば力仕事もできるのだけど、いかにせんこの小さな体ではできる事の方が少なかった。

青田買いの方だって、もう少し知識が増えなければ見抜く事は無理だ。

私はぐるぐると考えながらクロのお母さんである、アルファさんについていく。アルファさんは洗濯場で水をもらうとタオルを濡らし、私に差し出した。

「ほら、眉間にしわ寄せてないで、早く拭いちゃいなさい」

「ありがとうございます」

「これぐらいいいわよ。あ、ちなみに私はすでにオクト鼻屑だから、媚売っても無駄だからね」

ああ、そう言えばアルファさんも売れっ子だっけ。最終的にはそこにたどり着きそうだったが、まだそこまで考えていなかった私は、先にくぎを刺されてしまった。

「仕事ならいくらでもあげるわ。でもそんなのより、技を盗みんで色々考えなさい。その方が、いじめられなくなる為の早道よ」

それはつまり売れっ子になれという事……。つまり無理という事です。分かります。

私は理解できないふりをして、タオルで顔をぬぐった。

いう事は無茶苦茶だが、アルファさんには感謝だ。もしも濡れタオルを用意してもらえなければ、私は明日の水浴び時間まで汚れたままだった。私だけでは洗濯場でタオルなんて貸してもらえないだろうし、混ぜモノというだけで、井戸を借りることも難しかっただろう。

つくづく運のない生い立ちだ。

部屋へ戻ると、クロはすでに服を着替え終わっていた。アルファさんからタオルを受け取り顔をふく。

「そうだ。オレたち、これからビラくばってくるから。で、その後あそんでくるから」

「ふうん。だったらもっと、派手な服着て行きなさいよ。折角可愛い顔に産んであげたんだから、もっと活かしなさい」

「ええつ。そのあとあそぶから、よこすとおこるだろ」

「汚さないように遊ぶの。汚すことするなら一度戻ってきて汚してもいい服にしなさい。ちゃんと看板になる事も一流の芸人よ」

そう言っただけアルファさんは水兵みたいなセーラー服型の舞台衣装をクロに渡す。襟の部分がキラキラとラメっついていて遠くからでも目立ちそうだ。そしてさらにもう一着子供用の服を取り出した。

「はい。オクトもこれに着替えなさい」

私は逆にピンクのセーラー服だ。クロが青だから反対色を持ってきたくれたんだろうけど、ちょっとためらう。ちなみにクロが短パンで、私がスカートだ。年齢考えれば微笑ましい感じなのだが、前世の記憶が可愛らし過ぎるそれに躊躇いを覚えさせる。

……これはほぼ、どこぞの美少女戦士の恰好ではないだろうか。

コスプレの四文字が頭をめぐる。

「私は――」

「着替えなさい」

「――はい」

似合わなかったら、逆に道化っぽくて看板になるかもしれない。
うん。前向きに考えよう。

これも仕事とわりきり服を脱ぐ。そう言えば前世の記憶がある割に、裸になることにはあまり抵抗がない。クロとは兄弟みたいなものだし、そもそもクロは六歳だ。恥ずかしいと思える年齢でもないからかもしれないけれど……。

私の前世って、性別どっちだ？

一般常識的な記憶は存在するのだが、どうも当の本人の事になるとかなりあやふやで欠如が多い。もしかしたら今は生物学的には女だが、前世が男だった可能性もある。

とはいえ、前世がどちらでも関係はない。混ぜモノである自分には、結婚とかまずあり得ない行事なので、性別とか考えるだけ無駄だ。

「うん。さすが親友の娘ね。かわいすぎるわ。さあ、行つてきなさい！」

パンと背中を叩かれると、そのままテントの外に押し出された。

下手に鏡を見て行く気が失せる前なのである意味良かったと思うしかない。うん、知らぬが仏作戦だ。

「オクト、いこうぜ！」

クロに急かされ、私はコクリと頷いた。

自分の場合、まだ幼すぎる事もあって、買いだしなどの町に出る仕事はまわってこない。ここ一カ月間は休みがなかった事もあって、町へ出るのは久々だった。なので行きたくないわけではない。

「このまちは、ふんすいがあるところに、人があつまるんだってさ。」

へたに店の前とかでビラくばると、おこられるからそっちでくばろう」

そついうものなのか。

ビラくばりと言うので、駅前のティッシュくばりが頭に浮かんでいた。大抵そういうのは商店街で行われていたように思う。というのも不特定多数の人が流れていき、比較的多くの人にもらって貰えるからだ。

首をかしげると、クロがさらに説明してくれた。

「みせがいっぱいあるとこでえいぎょうするには、なんかえらい人にし……しんせい？しないといけないんだって」

「偉い人って？」

「わかんねえ。いいじゃん。ふんすいとこならおこられないし」

まあ、その通りだ。ただ噴水のところが公園みたいな役割だとすると、こつちから人を集めるようにしなければ中々終わらないかもしれない。

噴水を目指して歩いて行くと、商店街にでた。商店街は先ほどまでとっただけ雰囲気が変わり、地面がタイル張りになった。またレングで作ったような店が立ち並び外観が統一されている。まるで中世ヨーロッパだ。そこを時折馬車が走っていく。

「クロ。ここは何の店があるの？」

馬車はバスや電車のような役割をしており一般客も使うが、こういった店まで乗りつけて来るのは貴族や金持ちだけだ。つまりはそういう客に対応した店があるという事になる。

「んーっと、そこがレストランで、そつちがざつか。あとまほうぐの店とかほうせきの店とか、ぶきうつてるところもあつたはず」

「ふーん」

まるでRPGな世界だ。魔法具の店とか、武器を売っているとか、子供が入っても大丈夫なら一度見てみたい。

この世界は、日本ではゲームにしか出てこないファンタジーな種族がいるだけあって、魔法というものが存在した。学校で学び資格をとったものを魔術師と呼び、そうでない者を魔法使いと呼ぶそうだ。魔法使いも試験さえ通れば魔術師と名乗れるのだが、なかなかその試験が難しいらしい。

ちよつとした魔法具なら一般人も使えるそうなので、機会があれば触ってみたいと思っていた。所詮は二次元に憧れたミーハー魂だけど、魔法はロマンだ。仕方がないと思う。

「あと、くすりの店と……えっと。そうだ。いかいやがあるってだんちよーいつてたな」

「イカイヤ？」

何の店だろう。

あてはまる字も思い浮かばず首をかしげる。イカ嫌？以下胃や？「いかいの物、えっとこことはちがうせかいでつくられた物がうられてるんだって」

「……そんなのあるの？」

つまり、『いかいや』というのは、『異界屋』ということだろう。文字があてはまった瞬間、落雷を受けたような衝撃が走った。

「うん。たまにコンユウコにながれつくってさ。きほんつかい方わからなくてガラクタだけど、マニアが高くかうんだって」

異界。私の妄想だけじゃなくて、本当にあるんだ。

ドキドキと心臓が脈打つ。その異界は、私が知っている所だろうか。この頭の中にあるのは妄想じゃないと教えてくれるのだろうか。不安と期待がぐるぐると渦巻く。

「オクト、あとで行ってみる？」

私の動揺がクロに伝わったらしい。

それでも私はクロの言葉に、私は一も二もなくうなづいた。

1 - 3 話

噴水がある広場は、確かに人は多かった。

いい憩いの場であり、旅行者にとっては観光の名所なのだろう。広場は噴水を中心に円形になっており、下のタイルが魔法陣のような幾何学模様となっている。原理は分からないが、この噴水は魔法が関わっており、シンボルのようなものになっているのだろう。

周りには出店もあり、とてもにぎわっている。……ただし、私の周り以外では。

「どうみても避けられてるよね」

噴水に腰かけた私の周りには、誰もいない。さっきまでは確かに獣人族のカップル達がイチャイチャしていたはずなのに。

私はクロと半分にしたビラをパラパラめくりながらため息をついた。さっきから一枚も配れていないビラが憎い。それにしても混ぜモノってのはどれだけ嫌われているのだろう。特にスリをしようとかそんな邪念は一切ないのに、近づけば逃げられ、普通に歩いているだけで大きく避けられる。

まだ一座の方がマシだ。少なくとも蜘蛛の子散らすように私から逃げる事はない。

「結構かわいらしい外見してると思うんだけどなあ」

噴水が止まるタイミングで中を覗けば、蜜色の髪をおかつぱくらに切りそろえた子供が水に映った。耳は獣人族のように大きく、エルフのように先がとがっていてぬいぐるみのようだ。青色の瞳は大きく、その所為で人形のように見えた。右目の目じりにある青黒い色をした痣さえなければ、自惚れではなくマジで美少女を自称したっていいと思う。

外見はイタイゲな幼児なのに、混ぜモノってだけで避けられるっ

て、世知辛い世の中だ。でもまだ石とかぶつけられるわけではないし、イジメレベルで考えれば、まだいい方かもしれないと自分を慰めてみる。

「オクト、なにさぼってるんだよ」

ぼんやりと再び噴き出した噴水を見つめていると、クロが腰に手をやって私を睨みつけてきた。自分だけ働かされていたのだから怒るのはわかる。

と、言われてもなあ。

「受けとつて貰えないから」

「あつ……」

クロはすぐに理由に思い当つたらしく、顔を歪めた。それは同情するものではなく、悔しそうな表情だった。

「オクトはこんなにかわいいのに」

うん。それは将来、本気で好きになった人に言おうね。たぶん母親が影響していると分かつてはいるのだが、私としてはクロがフェミニストどころではなく、タラシに成長しないか心配だ。

「クロはどう？」

「オレもほとんどもらってもらえなかった」

クロの手の中にもまだまだビラは残っていた。結構、広い広場だ。人がこつちによって来てくれない限り、配るのは大変だろう。

そこでふと私は気がついた。

……そうか。寄つて来てもらえばいいのか。

「クロ、今から私がいう言葉を大きな声で言つて」

私はクロの耳元に口を近づけると、こっそりと今思いついた事を伝えた。まわりに人がいないのだから普通に喋つたつて構わないだろうけど、なんとなく打ち合わせはこっそりした方が仕事っぽい。

それに仕事と割り切らなければ、これからする事は凄く目立つので恥ずかしいのだ。

「わかった。でも、オクトはへいき？」

「うん。早く終わらせよう」

気遣うクロに、私は頷くとビラをすべてクロに渡した。

そして私は体から力を抜き、目を閉じる。大丈夫。できるはず。というかやるしかない。

「さあさあ、みなさん、おたちあい。ごようといそぎでないかたは、きいといで」

子供っぽくないクロの口調に、人がいつせいにこっちを見たのが気配で分かった。

「とおでのやまごしかさのうち、きかざるときはものの黒白、ぜんあくがとんとわからない」

こちらへやってくる足音が聞こえ、私の耳が震える。獣人の血のおかげで、私の耳はとても性能が良かった。

「さておたちあい。ここにすわるは、あわれなまぜモノのむすめ」
ドキドキと心臓が五月蠅いが、まだ動かない。できるだけ人形のように見えるように表情を出さないように気をつける。

「まぜモノともうしましても、ただのまぜモノとはちがう。母がしぬまでことばをはなせず、母がしんでもその口からでは、いかいのうたのみ。せんのうたをしろくと、なにもわからぬにんぎょうのうた。しかしなぜだかみにここちよい。さーて、おたちあい。さいこのこうえんせまる、『グリム一座』！ほんじつしゅっちょうこうえんだっ！」

よく言った。

クロにお願いした言葉は長い上に喋りにくいものだったはずだ。それでもクロは一言一句間違えず喋りきった。ここから先は私の仕事だ。

ぱっと目を開ける。思った以上にまわりに人の輪が出来ていた。しかしそれが何なのか分からないといったように、私は表情を動か

さないように気をつける。そして息を吸った。

『今ー、私のー、願ーいごとはー、叶うならば、翼がほしーい』

私は精霊譲りの透き通るような声を披露した。内容は合唱コンクールレベルの歌だけど、日本語だ。聞いたこともない言葉はきつと神秘的な感じに聞こえるだろう。

特にこの世界は魔法がある為か、電気というものがなく、テレビどころかラジオもない。またCDやカセットテープどころか、レコードすら発明されていなかった。つまり娯楽というものが生演奏のみなのだ。そしてそれが聞ける場所は限られている。無料で変わった歌、しかもきれいな音色で聞けるなら、ホイホイ人が集まってくるはずだ。

案の定、歌が聞こえ始めると、どんどん人が集まってきた。そこへすかさずクロが、ビラを配っていく。これなら、ビラがはけるのも早いだろう。

『父さーんが残したー、あつーい思い。母さんがくれたー、あのまなざーし』

それにしても、千の歌は言いすぎたなと少し反省する。合唱コンクールの歌意外には、流行りの歌や童謡、それらがなくなると、アニソンや、本家本元歌う人形の歌しか知らない。ネギを振り回す人形の歌は中毒性はあるが、どうなんだろう。人前で熱唱すべき歌だろうか？

いやでもそれはアニソンも同様だ。超能力者や宇宙人、未来人と友人の少女の歌はまだいいとしても、オタクな女の子が織りなすアニメの歌は、ちょっとアレだ。テンション高すぎてあまり手を出したくない。……というより、それを完璧に覚えている前世の自分に絶望しそうだ。うん、前世は前世。深く考えてはいけない。

『どーかとうしてくだしゃんせ。御用のないものとおさせぬー』

段々アニソンORボーカロイドの歌に近づいてきたぞという辺りで、クロの持っているビラは全てはけた。その事にほっとする。良

かった。本当に、良かった。

「では、しゅっちょうこうえんは、ここでおわります。かのじょうのうたがきになるかたは、ぜひ『グリム一座』までおこし下さい」

ぺこりとクロがお辞儀をしたところで、私も歌うのを止めた。

久々に大きな声を出し続けたので喉が痛い。しかしそれをおくびにも出さず、私は再び噴水に腰かけ目を閉じた。ゼンマイが切れてしまった人形をイメージして体の力を抜く。

しばらくがやがやしていたが、それでも徐々に人の気配がなくなっていく。動かなくなってしまうえば、何にも面白くないし、私は混ぜモノだ。人がいなくなるのは早いだろう。ほとんど人氣がなくなつたところで、私は目を開いた。

パチパチパチ。

突然拍手がなつて、私は目を瞬かせた。

「凄いね。楽しかったよ、ありがとう」

キャベツのような緑の髪をした少年がにっこりと笑いかける。どうしていいのか分からず、私は曖昧に笑った。混ぜモノに笑いかけるなんて、変な奴だ。

「是非公演を見に行かせてもらうね」

その言葉に、私は頭を下げる。クロに話させた設定だと、私は歌以外話せないことになっている。まだお客がいる以上、その設定を崩すわけにはいかない。

少年は動かない私の近くまで歩み寄ってきた。近くで見ると瞳も同じく、キャベツのような色をしている。顔はパーツの一つ一つが整っており、まるでファンタジーの権現のような美少年だとぼんやり思う。

「でも異界の歌はあまり披露しない方がいいよ。悪い人に捕まっちゃうから」

耳元でささやかれた言葉にどきりとする。私が危うく声を出しか

けた所で、クロが私と少年の間に入った。

「おきやくさま。つぎはいちざのぶたいでのごうえんがありますので、ぜひきてください」

「うん、そうさせてもらう。じゃあね、ドールちゃん」

少年は手を振ると、さつとその身をひるがえした。

一体なんだったのだろう。……年齢の割に落ち着いているし、言葉も綺麗な発音だ。なまりを感じられない。お忍びできた貴族かなにかだろうか。

それにしても疲れた。

私は、今度は演技なしでぐったりと噴水にもたれた。

「オクト。すごいぞ。ぜんぶなくなった」

「うん」

興奮気味なクロに、私は相槌を打つ。それにしても、ここまで上手くいくとは思わなかった。私はほっと息をはく。

それと同時に先ほどの声をかけてきた少年が脳裏に浮かんた。彼は何故、あの歌が異界の歌だと信じたのだろう。それとも少年の言葉は演技と思った上での冗談だろうか。

まあ関係ないか。私は気を取り直すと、いまだ興奮気味話すクロに手を伸ばした。

折角町に出てきたのに、このままじっとしているのは、時間が惜しい。

「異界屋にいく？」

2 - 1 話 小さな賢者様

異界屋は商店街でも少し奥まった場所に存在した。

店先には共通語である漢字のような形の龍玉語と、今滞在しているアルベロ国の言語を併記した看板が飾ってある。ただし残念な事に私は文字を書いたり読んだりできないので、たぶん異界屋と書いてあるのだらうと想像するしかない。

しかしそれは決して私が混ぜモノだから知識不足というわけではないと思う。多分この世界の識字率は高くないんじゃないだろうか。商店街を歩いたが、店先の看板には必ず分かりやすい絵が描いてあり、場合によっては絵しか描いてない所もあった。

「い、か、い、や。うん。ここだここ。だんちよーがいつてたの」

「クロって、文字読めるの？」

隣で看板を見つめるクロを見て驚いた。

「おう。母さんがおしえてくれたんだ。じはおぼえといった方がとくだってさ」

確かにそうだけど、それで教えられるって、凄くない？

アルファさんって剣の達人だし、一体どういう人何だらう。まあ、一座にはわけあり系の人も身を寄せていたりするらしいので、きつとそういった類なのだらうけど。

異界屋はあまり客が入らないのか、とても静かだった。扉をくぐるととカウンターに座ってる猫男がちらりこちらを見て顔をしかめる。それでも今はお客と商談をしているようで、あえて追い出すところへは来ない。

これ幸いと私達はそのまま奥へ進んだ。

棚に並べられたものたちは、新品ではなくどこか破損している事もあれば、汚れてしまっていたりもした。変な形のつばや蛇のよう

なオブジェなど、不思議なものが沢山ある。ただ問題は、そのどれもが私の記憶には刺激をしてこないのだ。簡単にいえば、どれも良く分からないガラクタなのである。用途がさっぱり分からない。

ここから導き出される可能性は3つ。

？異界といっても私が知っている異界ではない、さらに別の世界から流れ着いている。

？ここにあるのは日本以外の国のものであるため、前世の人も知らない。

？私の頭の中の記憶はただの妄想である。

？は除外してしまいたいが、記憶につながるものが何もないければ、私もそうではない自信がない。

できる事なら、手にとってしつかり、じっくりと見て考えたいが、？であった場合、呪いの類でないと限らない。なんといつてもこの世界がすでに、RPGもどきなのだ。装備したら外せないよ的なアイテムだったらマジ怖い。

「んー……ないな」

店自体はさほど広くはなさそうだ。

少し歩いただけなのに、すぐに行き止まりにきてしまった。それにしても、せめて系統だけでも同じものを固めておいて欲しい。ざっくばらんに置かれているせいで、見落としもありそうな気がする。私はもう一度戻ろうとまわれ右をした。

ビビビビビビッ！！

振り向いた瞬間、突如鳴り響いた音に私はドキリとした。まるで警報機のような音だ。音源の先を見れば、クロが尻もちをついている。

「なにやってんだっ？！」

茫然としているクロの襟元を猫男がつまみあげた。クロの体が軽々と中に持ち上がる。その手には卵型の何かを握っていた。音源はたぶんそれだ。足元にカランと金属製のものが落ちる。

「はなせよっ!!」

「店のものを壊しやがって。ここは子供遊ぶ場所じゃないぞ」

「こわしてねーよ。さわっただけだって」

このままでは、お役所につき出されかねない。

私は咄嗟にクロが持っているそれが何なのか閃くと、足元に落ちた金属を拾った。

「クロ。貸して」

クロが握りしめていたものを受け取ると、穴の部分にフックを突っ込んだ。するとけたたましく鳴り響いていたベルがピタリと止まった。

よかった。上手くいった事にホッと胸を撫ぜおろす。

「……何したんだ」

「壊してない」

私はもう鳴かなくなった防犯ブザーを訝しげな猫男につきつけた。「防犯ブザーが正常に動いただけ。クロを放して」

確かにいきなり音を鳴らしたのは悪かったが、首根っこをいきなりつままれるほどの事ではないと思う。子供だって、混ぜモノだって人権があるのだ。

ブザーを受け取った猫男はとりあえずクロをその場に下ろした。

「いやー、嬢ちゃん凄いな」

先ほどまで猫男と商談をしていたらしい男が近づいてきた。多分魔族と思わしき、紅目の男は私を見下ろした。

「ところで嬢ちゃん。そんな事何処で知ったんだ？」

「えっ……」

何処？

ふと今言った言葉が、本来私が知っているはずのない言葉だと気がついて固まった。正直に前世の話をしてもいいだろうか。いや、駄目だろ。そんな話しても、頭がおかしい人扱いされるの関の山だ。それに異界の歌を歌った後に言われた『悪い人に攫われちゃう』の言葉が私の中で引っかかる。

というのも本来知っていなければいけない異界屋の店員が、商品の使い方を知らなかったのだ。つまり異界の知識はほとんど知られていないのが現状ではないだろうか。もしそうだとしたら、知っているという事は、その知識だけでもかなり価値があるはずだ。

……危険すぎる。

「……ママが教えてくれた」

私は嘘がばれないようにうつむく。

ママ、勝手に擦り付けてごめんなさい。でも私を守って下さいと心の中で懺悔する。

「混ぜモノの母親が？ 一体、どんな——」

「オクトがかなしんでんだからそれいじょうきくなよ。オクトのかあさんはしんだんだ」

私の前でクロが両手を広げた。

クロかっこいい。でもクロごめん。うつむいているのは、そういう理由じゃないんだ。ただ、都合良く大人たちも勘違いしてくれそうなので、そのままにしておく。うん。私、悪くない。

「それは悪かった。混ぜモノの子もごめんな。ところで、他には何か聞いていないのかい？」

私は怯えているように見えるようクロの背中にしがみついた。そしてこっそりと、相手を盗み見る。

猫男は毛むくじゃらで、あんまり表情が読めない。魔族の男は笑顔だが、だからっていい人とは限らない。今すぐにも、テントへ戻った方がいいんじゃないだろうかとまわりをうかがう。

「もしもこの後鳴らなかつたりしたら、嬢ちゃんたちが壊したって

疑われるよ？これは永久的になるものなのかい？」

「……電池が切れたらもう鳴らないから」

私はぼそりと付け加えた。

それにしても、凄く嫌な聞き方をする人だ。今鳴るのだから、今後鳴らなくても私たちの責任ではない。それなのにその言い方では、そうではない事になる。今の話を聞いた猫男が、そうやって言いがかりをつけてこないとは限らない。

それに彼はたぶん私たちが、旅芸人でそれほどお金を持っておらず、社会的地位も低いと踏んで発言しているのだろう。衣装を見れば芸人という事は一目瞭然だし旅芸人はそれほど儲かる仕事でもない。それに私たちが子どもであり、私が混ぜモノであるという事も不利だ。猫男とどちらの話を信じると言ったら、まず負けるに違いない。

「電池つてなんだい？」

「……動かす力になる元。頭の部分のねじを外すと中に入っているから」

猫男は手に持っている防犯ブザーをしげしげと眺めた。

これだけ話せば十分だろう。私はクロの服を引っ張った。

「クロ、帰ろう？」

早く帰ってしまった方がいいと、頭の中で警報になる。すでに自分の生まれからして厄介なのだ。これ以上厄介事はいらない。

「嬢ちゃん、待った。折角だからもう少しゆっくりしていかないか？なあ店主」

「ああ。是非そうしてくれ。お菓子もあるぞ」

……それ、人攫いが使う手口だから。私は呆れたように二人をみた。お菓子なんかで釣られるなんて馬鹿、いまだき――。

「おかし？」

クロが凄い興味津津という顔をした。そうだよ。クロは私と違って真正銘、純粋な子供だもんね。しかもお菓子なんてほとんど食べられないしね。

「クロ、駄目」

「でも——」

「駄目」

これではどっちが年上か分からないが、私はきっぱり首を振った。

「おいしい話には裏がある」

「おかしにうらがあるのか？」

「あー…… お菓子にあるんじゃない」

「ほら持ってきたぞ」

クッキーらしきものがのった皿を持つ猫男の目は糸目だった。たぶんこれが彼の笑顔なんだろう。その笑顔に雑念が見える私は間違っていない。

「あーん」

魔族の男に差し出されたクッキーをパクリと食べたクロを見て、私の顔は引きつった。

「……いくらですか？」

「払えるの？」

「たぶん払えません。」

私は心の中で滂沱の涙を流した。こうなったら頑張って、金持ちになろう。そう決意した瞬間だった。

2 - 2 話

さてどうしよう。

店内のど真ん中で話し合いも他のお客の迷惑になるという事で、カウンター横に特設机が設置された。確かに通路の途中じゃ迷惑だとは思うけれど、嘘を付けと声高々に言ってやりたい。そもそも店内は迷惑になるほどの客がいないはず。

「私は全てを知っているわけじゃないから」

言いたい事は色々あだが、それでもこれだけは伝えておかなければと席に座った私は開口一番そう伝えた。というかクッキーを勝手に持つてきたのはそちらなんだから、よく考えれば私たちが気にする必要はない。食べていいと言っておきながら、後からお金を請求するって詐欺だ。犯罪に負けちゃいけない。

「そんなの分かっているさ。嬢ちゃんがここにあるものすべてを知っていたら、それこそ何者だって話だからね。それでも知っている範囲で協力して欲しいんだよね」

協力とか言ってるけど、どうせ強制なくせに。

この魔族、口調は柔らかめだけれど、私たちを逃がすつもりはないというのが節々に感じられる。というのもも入口から通り場所に座らせ、自分が入り口に背を向ける形で座っているのだ。子供の足なら逃げられるはずもないのに、万が一逃げようとした時のためを考えて座ったとは思えない。用意周到さに本気で腹が立つ。……禿げてしまえ。

「見返りは？」

でも実際これ以上関わったりしたくないので、悪態は飲み込む。必要最低限で取引を終えて、早く店を出よう。

「クッキーもらったよ？」

「それは電池の事を教えたぶん。音を鳴らして店に迷惑をかけた分は、音の止め方と使い道を言った事でチャラ。今は対等」

少々強引だが、それぐらい強気で言わないと、どんどん請求されとんでもない事になってしまふ。立ち位置が上であればなおいいが、そうでなくても下になつてはいけない。

「面白い混ぜモノだな。よし教えてくれた情報によつては、何か商品をやろう。モノによつてはやれないが」

「くれるモノに得に欲しいものがない場合は？」

「何か欲しくて来たんだろ。それ次第だ。やれないというのは、すでに買い手が付いているものと、使い方が分かっている、高額取引のものだ」

つまり使い方が分かつてさえいれば、高額取引アイテムになるという事だろうか。後は今のところガラクタ。好きにしていという事だろう。

「さっきのブザー」

「あれが欲しいのか？」

アレでも良いにはいいんだけど。私は首を横に振った。

「アレじゃなくてもいい。アレと同じ世界から来たものが欲しい」

あのアイテムが唯一私の前世を肯定してくれるものだ。誰にも話せない事だからこそ、肯定してくれるものは欲しかった。自分の気がくるつてるんじゃないかなんて、考えずにすむ。

「つまり嬢ちゃんの母ちゃんは、その道具がある世界の事を嬢ちゃんに教えたというわけか」

魔族の言葉に私はコクリと頷いた。

きつと私が欲しがっている理由が形見がわりとか、そんな風に勘違いしてくれるだろう。

「分かった。3つ使い方を教えてくれたら、その中の1つをやるよ」

マジで？！

猫男、いい人だな。

たったそれだけでくれるなんて、太っ腹じゃないだろうか。やっぱり形見攻撃が効いたのだろうか。目が潤んでいる気がするし。

「教える3つにはそのブザーは含まない。店主、そういう事だよな」

「ああ、それはもちろん」

「……分かってる」

そして魔族の男は優しくない。

自分だって、そこまでセコク考えてないから。大げさに取引なんて言っただけ情報の元手はタダなんだし。問題はどやって日本のものを探し出すかだ。この店内広くはないが狭くもない。地道に探す日が暮れる気がする。

「じゃあそれっぽいのを持て来るから、そこで座っていて、くつろいでくれ。なんならジュースもってくるぞ」

「へ？」

「今自分で、どやって探そうって思っていただろ。いまどきの異界屋は、ネジとか文字とかで、ある程度は世界ごとに分類されているんだよ」

マジか。

いや確かに。驚いたが、すぐに納得する。

ただ収集するだけでは、異界屋では偽物が多発してしまう。何か分からなければ異界のものなんてアバウトな取引ではギャンブル過ぎる。となれば何か見分ける方法が必要だ。そしてそういう技能があれば、世界ごとの分類とかもしているだろう。

「ふーん。そういえば、なんでいせかいのだってわかるわけ？」

「世界の壁を越えたものは、一定の種類の魔力を帯びるんだ。それを魔術師が見分ける。人為的にはその種類の魔力を帯びさせるのは難しいからね。パチモンもでない寸法さ」

なるほど。

魔術師にはそういった仕事もあるのか。てつきり、RPGよろしく、魔物でも退治したり、王宮で仕えたりしてるのかと思っていた。「あんたは、まじゅつしなのか？」

「あんたじゃなくて、お兄さんね。そうだよ。異世界のものは新しい技術が多いからね。色々研究させてもらっている」

この魔族の職業は魔術師か。しかも研究という事はそれなりの所に勤めているんじゃないだろうか。

「そついや嬢ちゃんはお母さん亡くなったんだよね。お父さんは？」
「……知らない」

そついうと、魔族は口の端を上げた。その表情で背筋がぞくりとする。何今の質問？意図が読めなくて怖いんだけど。

私は魔族から目をそらしすと、店内へ目を向けた。それにしてもこれだけ色々と異世界から流れ着くって、この世界は一体どういう作りになっているのだろう。

「待たせたな。ちょっと見てくれ」

段ボールいっぱい持ってきた猫男は、机の上に3分の1ほど取り出した。

腕時計、コンタクトケース、ドライヤー……分らないのもちらほらあるけれど、これならば大丈夫そうだ。ただここからが問題である。私がこんなにいろいろ知っていると暴露するのはヤバいんじゃないだろうか。

ならば適当に3つ選べばいいのだけれど、教えたところで使えないものでは意味がない気がする。それとも使えないという情報すら彼らは欲しいのだろうか。今の段階では何が一番いいのが私には選べない。情報料としてもらう限り、それなりの事はしたいのだけだ。

「何だったら、手にとって見ても構わないぞ。どうだ、分かるのはあるか？」

「どうやら私が分からなくて道具とにらめっこしているのだと思っ
たらしい。」

「……おじさんはどれが知りたいの？」

「お兄さんね。もしかして、全部分かるのかい？」

その言葉に私は慌てて頭を振る。本当は結構な確率で分かっているけど、そんなこと言ったら危険な気がした。ガラクタが、情報次第で高値段という事だし。

「重点的にそういうのを調べてみるだけ。それと聞いているのは魔術師のお兄さんじゃなくて店主」

よく考えれば、何故アンタはいるんだ。自分と同じお客の立場なのに。店主とは友達かなんかなのだろうか。……分からない。

「ならこれなんか綺麗だが、何か分かるか？」

私は店主に指差された綺麗なものとやらを見た。キラキラした石で飾られているそれは確かに綺麗にデコレーションされている。

手にとって、二つ折りのそれを開いてみた。画面は黒く鳴っているが、割れたりなどはしていないようだ。下のボタンも無事である。でもなあ。

裏を見てカバーを開けるとちゃんと電池が入っていたが、その下のシールが赤く滲んでいる。

「これは携帯電話」

「けいたいでんわ？」

「そう、遠くの相手と話す為の道具で持ち運び可能なタイプ。ただこれは水に濡れて壊れてる。キラキラしているのは、そういうシールが貼って飾ってあるだけで、宝石ではないよ」

さっそく1個目から意味ないものを選んでくれてありがとうございます。胸が痛いです。電池のカバーを戻しながら目をそらす。き

つと見た目が派手だから目が行ってしまったんだろうけど、これなら自分で選べば良かった。

「へえ。そういう便利な道具があるんだ。テレパシーみたいなもの？」

「あ、いや。特別な能力がなくても誰でも使える。ただし同じものがもう一台必要なのと、それでも電波塔がない場所では使えない。でもカメラ機能や音楽機能、ゲーム機能は使えると思う。後はこれもさっきの防犯ブザーと同じで電池が切れたら動かない」

私が心を痛める必要ないぐらい、魔族は全然残念そうではなかった。むしろ楽しそうに私の話を聴いている。って、あんたじゃなくて、得しなきゃいけないのは店主だから。

「誰でも使えるってというのがいいねえ。カメラとか、ゲームっていう機能も気になるなあ。店主、他に同じやつはない？」

「これと同じのは入ってきてないな」

同じというのは何を見て同じとするのか少し気になった。

同じをデコつてある所で判断されてたらないかもしれない。案外段ボールの中には一個くらい混じっていきそうな気がするが、言わないでおいだ。携帯電話の使い方では、1個教えるだけでも凄く時間がかかってしまい割に合わない。

私は机に投げ出されたもの見て、次は自分で選んだほうがいいのかもなあところそりため息をついた。

2 - 3 話

さてと。私自身で選んだほうがまだましと分かったならさっさと選んでしまおう。

そうは思ったが、優柔不断な自分では中々選ぶ事が出来ない。色々考えた上で私は一つのペンを選びだした。ペン類ならば、なんとか使えるのではないだろうか。お土産系と思しきそれは、シャーペンかボールペンだろう。カチリと押すと先っぽがでてきた。どうやらシャーペンだと分かると私は数度押す。しかし芯は出てこない。

「オクト、それなに？」

「シャーペンシル。文字を書く道具だけど……」

とりあえずふたを外して逆さに向ければ中から芯が2本出てきた。良かった。これで芯がなかったら、またも使えないものを教えてしまうところだった。1本を中に戻すと、もう一本を先から入れる。

多分短い芯が残ってしまったているのだろう。最初は抵抗があったが、しばらくするとすんなりと中に入った。私はふたをはずすと、折れた芯だけ取り出す。

「これで大丈夫。これは紙に字を書く道具。中に入っている芯がなくなると、使えなくなる」

「芯って、これの事か？」

猫男が折れた芯を拾い上げた。

「うん。でもある程度の長さがないと使えない」

「この物質は何でできているの？」

「炭素と呼ばれるもの。鉱物の一種。作り方は知らない」

魔族も興味津津で芯を見つめていたので、私は手に持っていたシャーペンを差し出した。実際に書いてもらった方が分かりやすいだろう。

「上を押すと芯がでる仕組み。芯さえあれば、紙に文字が書ける。だけど出し過ぎると折れるから」

魔族はカチカチカチと興味深げに押している。そしてポトンと全部出してしまった所で、ふたを開け再び中に芯をしまった。

「これだけ細いものだと、ドワーフ族やエルフ族でも作るのは難しそうだね」

エルフは自分にも血のつながりがあるので多少は知っているが、ドワーフとはどんな人たちなのだろう。例として上げるという事は手先が器用な種族のだろうか。

「なあなあ。そいつらって、どんなやつ？」

私が首をかしげていると、先にクロが聞いてくれた。

「ああ。ドワーフは鉱物の扱いが得意な奴らで、地中に住んでるんだよ。エルフ族は頭がいいから作り方を知っているかもしれないんだ。手先がいちばん器用なのは人族だけど、手先が器用だけじゃ無理だし。それに本体の方も単純そうでかなり技術が高い……この穴とかどうやって開けるんだろ？」

シャーペン片手に魔族は唸った。まるで匠の技を見たかのような感じだけど、日本では当たり前の商品だ。しかも量産系。それだけ文化が違っただけ何だろうけど、ちょっと騙している感じで申し訳ない。

とにかくあと一つだ。良心の呵責に苛まれる前に、さつさと終わらせようと見渡した。どれが手ごろだろうと悩んでいると、魔族が私の目の前に拾い上げたものを差し出した。

「では最後に、この造形は何か教えてもらえないかな？」

彼が手に持っているのは、車のプラモデルだった。教えてもいいが、ちらりと猫男を見る。私が教えている相手はあくまでも猫男であって、この魔族ではない。

「いいの？」

「ああ。先生にはいつも無理を聞いてもらってるしな。もし知っていたら、教えてくれないか？」

「……それは車の形をした置物。車は馬車と同じ役割をするけれど、馬は使わずに走る乗り物の事。本来は人が乗れるぐらいの大きさを

している」

猫男がそれで良いというならと、私は車について話した。たぶんプラモデルについてではなく、車について話した方が、魔族には有益な気がする。

「馬がないのにどうして走るんだい？」

「エンジンというものがあって、それがタイヤを回しているから。エンジンを回す燃料はガソリン……と聞いた事があるだけで、私も詳しくは知らない」

残念な事にシャーペン同様使い方を知っているだけで、私の記憶には作り方などの知識は入っていなかった。たぶんそれを知らなくても困らない人生だったのだろう。

「なるほど。車ねえ。それが馬車の代わりに使われているという事か。わざわざそんなものを作るという事は、その世界には馬はいないのかい？」

「……たぶん馬よりも効率がいいからだと思う。走る分だけのガソリンはいるけれど、毎日の餌はいらない。それと糞などの処分にも困らないから……ってママが言っていた」

何処まで話してもいいものか。

あまり向こうの世界の事を話すと、いらない厄介事が増える気がしてならない。どうしてそこまで知っているのかと聞かれても困る。だが魔族は特にその事に大して聞いてくる事はなかった。ただぶつぶつとつぶやきながら車のおもちゃをこねくり回す。

少し自意識過剰すぎたかもしれない。その事実にはホッと胸をなでおろす。とにかくこれで終わりだ。

「これで3つ」

私は猫男の顔を見た。

約束はここまでだ。さてどう出るかと、ドキドキしながら相手の反応を待つ。自分は混ぜモノで、なおかつ子供なのだから、情報料を踏み倒されたとしても仕方がないくらいは思っている。とにかく無事に一座に戻りたかった。

「分かった。約束だからな、好きなのを選ぶ」

猫男はにやりと犬歯を出して笑った。ごねるつもりはないらしい。

…… 本当にこの猫男いい奴だな。

私は内心びっくりしつつ、机に目を落とした。あまり大きなものだと目立つので、貰ったはいいが、他の団員にとりあげられると予想できる。

「なら携帯電話がいい」

悩んだ末、私は最初のそれを選んだ。

もう壊れてしまつて使えないと分かつていても、一番懐かしいと感じたのだ。きっと前世では携帯電話を持ち歩いていたのだろう。

「確か壊れているんじゃないか？」

「うん。でもこれがいい」

「なら持つていきな」

使えなくても、あるというだけで十分だ。それだけで、自分は空っぽではないと分かつて少しだけ救われる。

私は携帯電話を大切な宝物のようにそつと拾い上げるとポケットにしまった。

「じゃ、オクト。いこうぜ」

私は頷くとクロの手を握り椅子から立ち上がった。それと一緒に魔族も立ちあがる。そして彼は入口へ進んだ。

もしやついてくる気かと睨むと、入口のドアのところで立ち止まった。

「どうぞ、小さな賢者様」

につこりと笑つて魔族は扉を開けたまま支えていた。どうやら見送りをしてくれるらしい。

行動は善意の塊なのに、何か企んでいるように思えてならないのは、私の考え過ぎだろうか。是非とも、そうであつて欲しい。自意識過剰、万歳。

私は魔族を睨みながら、入口を潜る。

「またね」

『また』なんてもうないから。

ニコニコと赤い目を細めて手を振る魔族から私は顔をそむけた。クロは律義に手を振っているが、とてもそんな気分にはなれない。

異界屋が見えないぐらい離れた場所であろうやく私は肩の力を抜く事が出来た。振り向くが、誰かが後をつけている様子もない。

「……疲れた」

「じゃあ、テントにもどろう?」

クロの言葉にコクリと頷く。

「でも、いいの?」

クロは行きたいところはなかったのだろうか。どう考えても私の用事につき合って貰ったただけだ。

「オレはオクトとあそべればそれでいいんだ」

何て優しいんだろう。

私のササクレた心が一気に癒された気がする。子供って何て可愛いんだろう。自分も子供だけど、この純粋さは前世に捨ててきてしまっている。

「ありがとう」

私は上手く言葉だけでは伝えきれない気持ちを伝えたくてとギョッとクロの手を強く握った。

3 - 1 話 理不尽な選択

「あれ？母さんいないね」

テントに戻ったが、アルファさんの姿はそこにはなかった。たださつきまで居たらしく、飲みかけのコーヒーが置きっぱなしだ。その隣には新聞が開いてある。

「トイレかな？ま、いいや。よごれるまえにきがえよ」

クロの言う通りだと私も元の服に着替える。ゴアゴアとした麻の服に着替えると、なんとなくほっとした。やっぱり舞台衣装は肩がこる。

携帯電話を衣装のポケットから取り出すと、忘れないうちに自分の鞆に入れた。私の荷物はこの小さなカバンに詰まったものだけだ。基本的に服は着まわしというか、団員のお古がまわってくるし、ママもあまり荷物をもつ方ではなかったので鞆一つで事足りている。服をたたみ衣装ケースに戻した私たちは地べたに座った。

仕事が全くないというのはあまりないので、こういう時何をすればいいのかわからない。困ったすえ私は机の上にあつた新聞を手にとった。

「クロ。何が書いてあるかわかる？」

新聞は龍玉語で書かれているのは分かるが、縦書きか横書きかさえ分からない。一応イラストを入れてくれているがそのイラストにすら文字が入っており、さっぱりだ。

「……んーと、えーっと……んんん」

「ごめん。そんなに読みたいわけじゃないから」

新聞とにらめっこをして唸るクロに、私はすぐさま謝った。どうやらクロにとって新聞はまだ難易度が高いようだ。確かに6歳で新聞がすらすら読めたらかなり凄いだろう。

「えっと。ならクロって、どう書くの？」

「それならわかる。ちよっと待ってって」

そう言っでごそごと道具箱をあさったクロは、羽ペンと紙を取り出した。そこに大きく文字を書くと私に渡してくれた。

「ク・ロー・ド。これがりゅうぎよくごで、こっちがホンニこくご。オレはホンニこくうまれだから母さんがおしえてくれたんだ」

「えっ。クロード？」

アルファさんをはじめ、皆クロクロ言っていたので、てっきりクロが名前だと思っていた。そうか、愛称だったのか。新たな事実だ。「なまえをかくときは、くろーどってかけて、母さんいつてんだ。で、ひとまえでは、クロってなのれってさ。だれにもいっちゃいけないっていつてたけど、オクトはとくべつな」

それって……本当に愛称？

特別は嬉しいが、ちよっと荷が重い気がするのは気のせいだろうか。とりあえずクロがくれた紙をどうするべきかと迷う。

「えっと……」

「それやるな。オレのサインはきつとしようらいதாகうれるから」返そうと差し出したが、断られてしまった。どうしよう。

悩んだ末、とりあえず後でアルファさんに相談する事にした。もしかしたら考え過ぎかもしれない。ドキドキしながら、私はクロのサインをカバンの中にした。これも携帯電話と同様見つからないように奥の方に入れる。

「あら、もう帰ってたの？早かったじゃない」

「母さんただいま」

突然声をかけられて、私は慌ててサインから手を離れた。

「クロ、オクト、おかえりなさい」

「ただいま」

サインの事を早く伝えてしまいたかったが、挨拶をしないとアルファさんが怖いので、先にちゃんと挨拶をする。

「ちようどよかったわ。2人に大切な話があるからちよつと聞いてくれる」

いざ名前の事を話そうとすると、先にアルファさんが話し始めてしまった。大切な話とは何だろう。この旅芸人一座の事だろうか。

話の腰を折るのもアレだし、名前の事ならばいつでも聞けるので、私はコクリと頷いた。

「たいせつなはなしてなに？」

アルファさんは私たちと同様に地面に座ると、黒い瞳でまっすぐ私とクロを見た。

「この町での公演が終わったら、この一座を抜けるわ」

……へ？

思ってもみない言葉に私は目を見開いた。稼ぎ頭のアルファさんが抜ける？

「団長にも許可はとれているから、明後日の公演が最後ね」

何の話をされているのか理解できずに私はアルファさんをただ見つめた。今は凄く安定しているはずなのに何故？しかも団長が許可したって。

どんな風に話したのかは分からないが、この話は希望ではなく決定事項という事だというのは分かった。

「母さん！じゃあオクトはどうするんだよ」

「それでね、オクト。もし良かったら、私たちについてこない？」

「えっ、オクトもいつしょ？」

「ええ。ただし、オクトが承諾してくれたらだけど」

「もちろん、くるよな！」

クロがニコニコと私に笑いかけてくる。

でも私はどう答えていいのかわからなかった。一緒にテントに入
れて貰っているが、私とアルファさんは赤の他人だ。

「……どうして？」

「それはどうして抜けるかってこと？それともどうして一緒にこな
いかと誘っているのかっていう意味？」

「どちらも」

いきなりすぎて、私は混乱していた。

何が最善なのか理解するだけの情報と時間が欲しかった。ここで
アルファさんの話を承諾しついでに行くのが一番簡単で楽だと分かっ
ている。でも本当にそれでいいのだろうか。

「まずなんで出ていくことを決めたのか。それはこの一座が次はホ
ン二国へ行くことが決まったからよ。でもね、この新聞にホン二国
の王様が殺された事が書かれてたの。次に控えているのはその弟。
きつとしばらく荒れるわ。そんな危険な場所に行きたいわけがない
でしょ」

「……詳しい」

「ええ。一応腐っても生まれ故郷だから、チェックは欠かさないよ
うにしているの」

「いやいや。生まれ故郷は腐りません。そんなどうでもいいツツコ
ミが心をよぎるのは、たぶんまだ頭がちゃんと働いていないからだ
ろう。」

「団長にそれだけ危険だと伝えれば……」

「団長の考えでは、弟が即位するから、国中がお祭りになるだろう
という予想よ。だから祭り会場で公演をさせて貰おうって思ってい
るの。それも確かに一理あると認めるわ。私の意見と団長の意見が
あれば、団長の意見が優先されるのは当然。でも私は行きたくない。
だから抜けるの」

アルファさんの話は筋が通っているような気がする。でもどこか
おかしい気もした。

何故荒れると思うのだろう。兄が殺されたのは、弟が関係して

いるのだろうか。だとしたら兄弟の仲が悪のはホン二国では公然の秘密だったりするとか？……分からない。

「それと、何でオクトを引き取りたいかだったわね。それはオクトが親友の娘だからよ。ここで一人で生活するのは大変だわ。オクトは一人で生きるにはまだ幼すぎると思うの」

アルファさんの言い分は正しい。はたしてアルファさん達が居なくなったら、私はここでやっていけるだろうか。残念な事に私は、まだ買いだしもまともにはできない年齢なのだ。

特技も歌うだけで、混ぜモノである物珍しさぐらいしか売りがない。そして混ぜモノである事は、いい面と悪い面を両方兼ね備えていて、どちらかと言えば後者寄りだ。

「ただ一緒に来てもここよりもいい生活はできないわ。むしろ悪くなる可能性が大きいわね。だけど貴方にはまだ保護者がいると思うの。そして私はそれになれるわ」

赤の他人である自分に、そんな事を言っただけで貰えるのがどれだけありがたいことかは分かっている。

ただどう判断していいのかわかり分らなかった。まだ働く事の出来ない自分は、ついに行っただとしても、アルファさんに迷惑をかける事しか出来ない。

「分かったわ。これはオクトにとって大切な事だものね。明後日まで、よく考えておいて」

何も返事する事ができない私に、アルファさんは考える猶予を与えた。私は5歳児なのだから問答無用という事もできたはずだ。それどころか、いい面しか話さない事だってできる。でもアルファさんは違った。私が考えられるように情報を与え、なおかつ返事を待っていてくれる。それだけでも、何ていい人なんだろうと思う。

でもだからこそ私はどうしていいのか分からなかった。

3 - 2 話

出ていくか、出ていかないか。付いていくか、付いていかないか。

悩んでいても日にちは経っていくもので、あつという間に公演の日を迎えてしまった。公演は午前と午後の2回に分かれていて、朝から大忙しである。その為今のところまだアルファさんと話せていない。

会場のセッティングが終了したところで、私はパンと薄いスープ、一かけらのチーズをようやく口に入れる事が出来た。この世界での平民の食事は2回。朝食と夕食だ。ここに貴族や金持ち達は昼の軽い軽食が入る。一座も例にもれず2回なのでこれを逃したら夜まで空腹と対決をしなければならなのでありがたい。

「ほらほら、さっさと食べて仕事に行くんだよ」

他の団員と食事をしていると、副団長に急かされた。食事の後は、外で客寄せの為に歌を歌う事になっている。といっても、知能の発達が遅かった事もあって私はこの世界の歌を知らない。以前も母さんが鳴らす楽器に合わせて、ラララと適当に声を出すだけだった。精霊族は産まれた時から歌を歌うそうで、私にもその血が混じっている。そのおかげで適当に出した声でも、ちゃんと歌として聞こえていたようだ。今も音感と健在のようなので、ありがたい。

「オクト、いたっ！ いっしょにきやくよせしようぜ！」

スープを飲みほしたところで、クロが食堂に入ってきた。

「クロは食べた？」

「うん。母さんとすこしまえにな」

私は食器を返却場所へ持っていくと、クロの後についていった。そして道具置き場に寄ってから、敷地の外へ出る。

テントの外ではすでに一座に所属している魔法使いが、雲を使って今日の公演の告知をしていた。まばらだがお客は徐々に着始めているようで賑やかな声がする。

「さすが、さいしゅう日だね。すごいちからはいつてる」

「クロ、遊んでねえでちゃんと客呼べよ」

「わかってるよ。おじさんもちゃんとしごきなよ」

テントの周りでは、すでにグッズや食べ物の店が並んでいた。食べ物には通常価格より少し割高となるが、ここで買った商品は公演中に食べてもマナー違反とはならない為比較的売れる。また子供が好きそうなものが置いてあるのも、親の財布のひもを緩める一因だろう。この販売も収益に大きく関係してくると前に団長に聞いた。

店がある場所から少し離れた場所でクロは立ち止まる。

「だんちよーがこのあたりりでがつきならして、きやくをあんないしろだつて」

クロの手には、アコーティオンが抱えられていた。

私は「グリム一座、会場はこちら」と多分書かれている看板を掲げる。矢印が入っているし、私とクロの服装は、舞台用なので文字が読めなくても多分理解してもらえらるだろう。

「オクトもてきとうにうたったりやすんだりしてればいいから」

クロはそういうとアコーティオンをならした。確か音楽もアルファさんに教えてもらったと聞いたところがある。……剣が出来て楽器もできるって、アルファさん何者？

まあ今はそんな事考えても仕方がない。私も邪気の含まない笑顔を浮かべた。混ぜモノではあるが、見目は良いと思う。無表情さらししているよりは、いいは――。

「オクトかわいいっ！ー！」

「ふひゃっ?!」

クロがアコーデオンごと私にタツクルしてきた。腕に当たって地味に痛い。

「クロ？」

「かわいい。マジかわいい！！おっし、やるきでた！！だんちょーに、オレらのじつりよくみせつけるぞ！！」

……まあ、やる気が出たならいいか。

腕をさすりながら、私は落としてしまった看板を拾いもう一度掲げる。その隣で、クロがアコーデオンを鳴らした。その音楽はとても子供が鳴らしているとは思えないほど流暢だ。
音楽に合わせて私も、うだけで声を出す。

しばらくはそうしていたが、ふと気がつくと、クロの音楽が聞き覚えがあるものになってきた。ん？つとクロを見ればニツと私に笑いかける。

「このあいだ、オクトがうたってたきよく。だいたいあってるだろ」
「大体っていうか……」

ほぼ完璧だ。

嘘、アレは1回しか歌ってないよ？これ、アルファさんが凄いいじゃなくて、クロが凄いいんじゃない？そんな簡単に耳コピできるなんて信じられない。

「クロ、凄い」

「お兄ちゃん、だからな」

えっへんと胸をそらす、世の中のお兄ちゃんはそんなハイスベツクではないと思う。

ただ懐かしい音楽を聞いていると、もっと聞いてみたくなった。それも私が多分一番知っていると思われる、アニソンやボーカロイドの歌を。

どうしよう。聞けるって分かったら、無性に聞きたい。ビラくばりの時も、イメージ壊れそうだから歌えなかったけど、でも聞きたい。たぶん前世の私はそんな曲ばかり聞いていたのだろう。

「クロ……」

「なに？オクト？」

キラキラ純粋なまなざしが苦しい。でも自分の中に産まれた渴望は消せない。汚れた人間でごめんなさい。でも聞きたいんです。ニコニコしたいんです。

「今から歌う歌、それで演奏してくれる？」

「いいよー」

返事が軽い。

多分クロにとってはそれほど難しいものではないのだろう。せめてあまりにも場違いな歌にはならないように気をつけようと心に決める。

そして私はドキドキとしながら口を開いた。

「君は王女おー、僕は召使いー。運命分かっ、哀れな……」

私が始めに選択したのはボーカロイドの曲でも無難に感動できる歌だ。某金髪双子の歌である。今の私なら高音も楽々とでるのでありがたい。

間奏部分の音楽は表現できないけれど、歌詞があるところは多分音の外しもないはず。精霊族の血よありがとう。私は生れて初めて自分のご先祖様に感謝した。ママありがとう。

歌い終わったところで、クロを見た。期待のまなざしを止められない。パチパチパチとクロは拍手すると、歌詞があるところから音を鳴らした。

多少違つかもしれないが、ほぼ記憶のそれと同じ音に私は感動する。

すごいすごい。嘘みたい。

そこから私の中でたかが外れてしまったようだ。興奮が冷めやらぬ前にクロの音楽に合わせて私はもう一度熱唱する。そしてさらに次の歌をクロに強請った。私がアカペラで熱唱し、その後クロのア

コーディオンに合わせてもう一度熱唱する。それを飽きることもなく何度も繰り返した。

気がつくと、まわりに人だかりができてしまうほど楽しんでいた。

……オタクの記憶って怖い。

「いこくのうたもきける、グリムいちざ！ほんじつさいしゅうこうえん。かいじょうはあちらだよ！！」

クロが慌てて周りのお客を案内したところで、一度歌を休憩した。想像以上にハイテンションになってしまった自分に反省する。次は気をつけよう。

「ねえ、それも異世界の歌？」

顔を上げると、キャベツ色の髪が目飛び込む。緑の髪の人はこの国に多いが、珍しいほどの鮮やかさなそれは、数日前の記憶を揺さぶった。

何故、あの時の子供がいるんだろう。

「僕もチラシを貰ったからね。本当に今日で終わりなんだ。残念だなあ」

顔に出てしまったらしい。にこりと笑いながら少年は私にピラをみせる。

「君も舞台に出るの？」

その言葉に、私は首を横に振った。最終公演は、花形の人たちが全員出るの、私が舞台に立つタイミングはない。私が出る時は、誰かが休みをとったりする時の代役と決まっている。

「そっか。残念。なら見る必要はないな」

少年はチラシをびりびりと破ると捨てた。何をされたか咄嗟に理解できなくて、風に乗って飛んでいく紙を見つめる。

「僕は君の歌の方が聞きたかったんだけどね」

「……私なんかより、皆の方が凄い」

わざと怒らせようとしているのだろうか。

何が目的か分からないが、私はとりあえず思っている事実をできるだけ平然と伝える。私の歌は所詮、精霊の恩恵と前世の記憶の恩恵であり、切磋琢磨している彼らと並び立つものではない。

「何だ。喋れたんだ。残念。本当に喋る事の出来ないドールちゃんだったら連れ去ろうと思ったけど。ほら絵本だったら、悪い人に囚われたお姫様を王子様が助けるものでしょ？」

……コイツ、何言ってるんだ？

私は少年の言葉にドン引きする。王子様って何？

「でもこの場合は僕が悪人になるかな。それは困るなあ。仕方ないか。じゃあまたね、ドールちゃん。悪い人に攫われないようにね」
問答無用で攫わないだけの常識はあるらしい。もしかしたら攫うとかは彼なりのジョークだったのかもしれない。笑えないけれど。キャベツ色の髪の少年は、手を振るとテントとは反対方向に歩いて行った。本当に公演を見る気はないようだ。

「オクト！きゅうけいにはいつていつてさー」

少し離れた場所でクロが手招きする。私もこれ以上変な人に絡まれないので、クロの方へ足早に近づいた。

「クロ……さっきはごめん」

「なにが？」

「歌いすぎたから」

クロもきつと耳コピばかりさせられて疲れたはずだ。しかしクロはにこりと笑うと、私の頭を撫ぜる。

「オレはお兄ちゃんだからだいじょうぶ。それにオクトがたのしいと、オレもたのしいから。あとでまたやろう？」

その言葉は胸が痛くなるぐらい嬉しくて、私は何も言えなかった。それでも感謝を伝えたくて、ギュッとクロの手を握る。そしてでき

る事なら、この先もずっと彼の手を握っていらればいいのにと、
私はそう願った。

3 - 3 話

最後の公演も無事終了し、私は片づけを手伝っていた。力仕事はできないので、もっぱら道具を磨いたり保全をする。今もフラフープの数を数えている最中だった。

「オクト、ちょっといいかい？」

アルファさんに声をかけられ、私は立ち上がった。ドキドキと心臓が打つが、もう答えは決まっている。私は道具置き場から外へ出た。

空には満天の星が広がっている。この星が消えたら、アルファさんとクロはここから立ち去るのだ。そしてこの一座もこの町から出ていく。

「この間の、答えをそろそろ聞きたくて……」

「おい。アルファと混ぜモノ、団長に呼ばれてるぞっ!!」

アルファの声をさえぎるように、遠くから他の団員が大声が聞こえた。

「こっちは、今大事な話をしてんだよ」

「団長が至急って言うてるんだってっ!!頼むよっ!!」

「まったくもう。あいつは本当に自分勝手なんだから。オクト、悪いけれど話は後にしよう」

どうせいつ返事をしようとも意思が変わる事はない。私はこくりと頷いた。

アルファさんに手を引かれ団員の元へ行く。

「それで、肝心の団長は何処にいるんだい？」

「団長室だよ。何か上客が来てるんだ。公演依頼かな」

「何で公演依頼で私たちが呼ばれるのさ」

そっぴいえと団員も笑った。

しかし団員は上品な人でさと楽しげに説明続ける。私の頭の中には、キャベツ頭……じゃなくて、キャベツ色の髪の少年が思い浮かんだ。彼は私の歌が聞きたいと言っていたので、私が呼び出されるといったらそれぐらいだ。ただし彼は上品かもしれないが、公演依頼するような年齢には見えない。となればきつと誰か知り合いに頼んだのだろう。

アルファさんが私を引き取りたいと言ってくれている事はきつと団長も知っている。だからアルファさんと私の2人を呼んでいるのだろう。

「分かった、分かったから。ほら、オクト、行くよ」

アルファさんは団員の賛辞を片手で止めると団長がいるテントの方へ足を向けた。他の団員もまるで王族や貴族が来たかのような騒ぎっぷりだ。

「失礼します」

「失礼します」

アルファさんがテントの扉を開いたので、私も慌てて頭を下げる。本当に貴族ならば、公演を受ける受けないに関わらず、粗相をするわけにはいかない。もし何かをしでかしたら、二度とこの国へは来れないと前に団長からきいた。

「やっと来たか。アルファ、オクト、入れ」

団長と向かい合う様に、黒髪の男が中央で腰かけていた。マントを羽織っており服は見えないが、その止め具は多分大粒の宝石だろう。団員達が騒ぐのもなんとなく分かった。

もし本当に貴族からの依頼で公演をするならば、一座に箔がつくし、給金もかなり貰えることだろう。

「用事はなんですか？まだ片づけの途中なので忙しいのですが」

片づけは確かに途中だけど、一流の芸人であるアルファさんはそんなこと気にする必要ない。多分、客がいるから言葉のあやだろう。「ああ。まあ用事と言うのは、アルファというよりも、オクトに

だな。オクトこっちへこい」

団長に手招きされて、私はアルファさんを見上げた。アルファさんも仕方がないと肩をすくめると、私の手を放す。行って来いという事だろう。

団長はアルファさんよりもさらに大きいので、近づくと顔を見るのが困難だ。多分二メートルぐらいあるんじゃないだろうか。首が痛い。

「オクト。こちらは、王宮の魔術師である、アスタリスク様だ。お前を引き取りたいと申し出て下さっている」

「やあ、小さな賢者様。またあつたね」

そこにいたのは、異界屋にいた魔族だった。私を見下ろす紅い目は楽しげだ。だが私は楽しむ余裕もない。今団長は何て言った？

引き取りたいって、えっ？！どういう事？

「ちよつと、待って下さい。オクトは私が引き取る事なつたはずですよ」

混乱して何も言えない私より先に、アルファさんが抗議した。まだアルファさんには何も言っていないが間違つてはいない。申し訳ないけれど、アルファさんの好意に甘えようと私は決めていた。

「そもそも、お前には引き取れないだろ。混ぜモノがいたら、宿もまともに使えないんだぞ。お前から自身どこかに定住する気はないくせに。毎日野宿でもするつもりか？」

えっ。

私は団長の言葉に耳を疑った。混ぜモノは宿が使えない？なんで？そんなの初耳だ。

「混ぜモノはね、いつ何が起きるのか分からないからね。だから宿などはよっぽどランクが上な、保険に入っているような場所でないと思わせてもらえないんだよ」

知識不足で困惑している私へ、アスタリスクが説明する。

「そしてそんなホテルを使えるのはまず、貴族ぐらいだろうね」

つまり私やアルファさんでは到底無理だという事か。嫌な現実と
いうか、混ぜモノの人権のなさっぷりが酷い。混ぜモノって、本当
に嫌われているだと、しみじみ実感した。

「それは、私が高んとか――」

「なんとかって、何だ。オクトに顔を隠させて生きて行かせるつもりか？そんな事ノエルが願っていたとも思うのか？」

アルファさんは団長の言葉に、唇をかみしめる。

ママの願いなんて、きつと誰にも分からない。私自身は顔を隠して生きて、別にいいかとは思う。それだけ嫌われていて、その方が楽に生きられるなら問題ない。

でも私の所為で、アルファさんやクロに迷惑がかかるのは嫌だ。

「それに俺も慈善事業でこの一座をしてるんじゃないんだ。もちろん引き取り手がないなら面倒をみるぐらいの情は持ち合わせている。でもな、アスタリスク様はお前を引き取りたいとおっしゃられているんだ。オクト分かるか？」

その言葉は嫌というほど分かった。

私だけではこの一座ではやっていけない。力仕事も出来なければ、何か凄い見世物になる特技があるわけでもない。クロがいなければ
ビラ1枚配れない。ここでも私は足を引っ張るだけなのだ。

「……アスタリスク様の家に行く」

「オクト?!」

私はアルファさんの顔を見ないようにアスタリスクだけを視界に入れる。今アルファさんを見たら流石に心が折れそうだ。

悠然と笑う、アスタリスクはまるで悪魔のように見えた。彼が欲しがっているのはきつと私の前世の記憶だ。アルファさんのように私を思つての事では断じてないだろう。ただ理由がしっかりしている分安全だ。そして彼は私を引き取っても問題ないほどの金を持つ

ている。

「よろしくお願いします」

産まれはどうしようもない。こんなの、とても理不尽な選択だ。

……自分が何も分らないただの5歳児だったら良かったのにと
思った。

それでも、そうはなれないので、私は悪魔へ静かに頭を垂れた。

4 - 1 話 不安な新生活

ドサドサドサ。

何かが崩れる音と、痛みで目が覚めた。目を開けるがどうやら生き埋め状態になっているようで目の前が暗い。そして重い。

窒息死も圧死も避けたい私は、それを必死にかき分け体を起こした。

「汚いにも限度がある」

這い出した先は本、本、本。本の山だ。本棚も部屋の端いくつかにあるが、その中はすでにいっぱいな為、床に積んでいるようだ。付け加えるなら飛び石のような足場しかない部屋は決して狭いというわけではない。本の量が部屋の収納量とあっていないだけだ。

命の危機になるほどの本って……。

ため息をついて、上を見上げた。そこには壁紙が貼られた天井がある。……こんな場所で寝るのは初めてだ。私の頭の上はいつも布製のテントか、満天の星だった為、何だか変化気分になる。

アスタリスクは私を引き取りに来たその日のうちに、この屋敷へ連れてきた。転移魔法というものを使ったらしく、私自身は今どこにいるのかも分からない。ただ宮廷魔術師の宿舎だとだけ説明されている。家に帰るのが面倒なので、もっぱらここで生活しているそうだ。

宿舎ならもう少し綺麗に使えよと思うが、私が口にする前に魔術師は皆似たり寄ったりの部屋だと言われてしまった。嘘をつけ。

玄関先から全てが本で埋め尽くされているなんてありえないと思う。人間の生活する場ではないと声高々に言いたいのが、引き取ってもらった身としては雨風しのげるだけででも満足しなければいけない

いだろう。昨日は寝られる場所として、ソファアを発掘したところで、睡魔に負けた。おかげで今朝死にかけたわけだが。

「……起きよう」

疲れから考えると少し寝足りないが、一座ならこれぐらいの睡眠で働くのが当たり前だった。寝過ぎると逆に体の調子がおかしくなるだろう。

本を踏まないように気をつけながら部屋の外へ出る。すでにドアを閉める事は諦めているようで、開けっぱなしになっていた。

隣の部屋にはキッチンスペースがあつたが、さっきまでの部屋と似通った状態で、本で埋まっている。あの男、今までどうやって生活していたのだろう。昨日見せてもらった他の部屋も、バスルームを含め、全て本に埋まっていた。家主に許してもらえらるなら、その辺りから最低限の生活スペースを作らせてもらおう。

「……一体アイツは何を考えてるんだ？」

この宿舎の事もそうだが、アスタリスクは私に何をしろとか、何故引き取ったとか、何も言わない。昨日は夜も遅かったから説明がなかったのだろうけれど、その辺りの事をきっちり教えてくれなければ、どうふるまうていいのかわからない。

大方前世の異世界知識が目的に達しない。立場としては使用人又は奴隷として引き取られと思うのが妥当な線だ。しかし宿舎の方には私と同じ使用人の立場の人がいない為指示を貰う事も出来ない。ただし家の方には使用人もいるらしいので、今日はそちらに行つて指導を受けるのだろうか。

「不安だ」

分からない事だらけで推測しても、結局無意味だと分かっている。しかし何をしていいのかわからないというのは不安で、思考がぐるぐると廻る。

とりあえずキッチンに何か食べ物があれば朝食ぐらいは用意して

おこう思ったのだが、甘かった。戸棚には固くなったパンと調味料しか入っていない。……本気でどうやって今まで生活していたのだろう。

これで朝食作れと言ったら、アイツは魔族ではなく悪魔だ。

「オクト、おはよ」

「あつ、おはようございます。アスタリスク様」

探すのに夢中になっていて、背後から近付かれた事に気がつかなかった私は慌てて頭を下げた。今までメイドなんて経験した事がないので、どうしたらいいのか分からないが、とにかく敬語は使った方がいいだろう。

「ああ。俺、堅いの嫌いだから。アスタでいいよ。そんな所で何しているの？」

「……朝食の準備をしようと思いました」

「とりあえず、頭上げてね。そんな堅くならなくていいから。それより、オクトって料理できるの？」

アスタに言われ私は顔を上げた。黒色のパジャマを着たアスタは、とても宮廷魔術師とは思えないラフさだ。生地はいいものを使っているのだろうが、言葉も砕けているせいで一座の人とそんなに変わらないように見える。

いや駄目駄目。見た目に惑わされてはいけない。昨日だって大粒の宝石が付いたマントを羽織っていたのだ。一般庶民と同じはずがない。これはきっと最初は優しくおいて、何か粗相をしたらお仕置きする作戦に違いない。私とアスタどちらが上か間違えないように。

「簡単なものでしたらできます。しかし申し訳ございません。ここにあるものだけでは、私では作る事ができません」

きつと、私以外でもこの材料じゃ無理だけど。

でももし、彼が鬼畜なら、『作れるなら作って?』なんて無理難題言いだすかもしれない。そして作れなくてお仕置き。痛い思いをするのは最低限がいい私は先に謝っておく。謝ったなら、お仕置きも多少軽くなるんじゃないだろうか。

「そりゃそうだ。結構前に買ったパンしか入ってなかったでしょ。俺、もっぱら食堂ばっかで食べてるから。でも材料さえあれば料理ができるなら、オクトに頼みたいな。時間の縛りがあるし、色々制限もあって、食堂で食べるのは面倒なんだよね」

良かった。お仕置きはないらしい。

私は心の中でホッと胸をなでおろす。この分だと、少なくとも奴隷ではなく使用人として扱って貰えるんじゃないだろうか。

「分かりました」

「それとさ、何ビクビクしてるわけ?」

「……何のことでしょうか。もしも私の言動でお気に召されない事があったなら、申し訳……」

「その敬語だって。異界屋であつた時は、もっとふてぶてしい子供だったよね」

今思えば、あの時の私はよく無事だったな。

宮廷魔術師という事は、彼は何かしらの爵位を持っているはずだ。彼自身ではなくても、その親は爵位があるとみて間違いない。兵士と違い、魔術師はその職業につくまでに普通は学校に通う。そして通えるのは金持ちだけなのだ。たまに試験だけを受けて受かる魔法使いもいるが、そういう魔術師は宮廷には勤めないとあの後、アルファさんに聞いた。

「あの時のご無礼をお許し下さい。私は無知な子供でございました。今はアスタ様に拾われた身。精一杯お仕えしたいと思っています」

「ふーん。感謝してくれてるんだ」

「もちろんでございます」

聞かされたばかりの時は、内心腸が煮えくり返りそうだったが、一晩寝ると仕方がないと思えた。それよりも危うくアルファさんやク口を不幸にするところだったので、それを止めてもらえた事に感謝している。もう少し遅く、私が返事した後だったら、アルファさんは彼と真っ向勝負したかもしれない。タイミング的にもナイスだった。

「じゃあ話は早いや。そのへりぐだった、敬語は禁止。俺の方が年上だから、場所によっては多少の敬語は使ってくれた方がいいけど、普段は今まで通りで」

「はっ？」

「それと何か勘違いしているみたいだけど、俺は引き取ると言ったんだよ？」

「アスタ様の使用人として、引きつとつていただけたんじゃ……」

何かおかしいだろうか？

私は首をかしげた。どこかに預けるつもりで引き受けたのだろうか。いや、でもそれだと料理ができない。料理の方は一時的とか？ 分かん。

「様も禁止。せめて、さんでよろしく。もしくはお父様なら可かな。永遠のお兄さん自称してるけど、一回くらいは可愛い子に『お父様？』って呼ばれてみたかったんだよね」

「えっと……」

何だ、その気持ち悪い発言は。

可哀そうなものを見るような目になってしまったが、これは生理的な現象なので仕方がない。無礼だと思ったら、そもそも顔を上げさせないで欲しい。

「賢者様のくせに理解が遅いなあ。それほど意外？ 俺がオクトを養子として引き取ったって事」

「……はあ?!」

用紙でも容姿でもなくて、養子？

驚きすぎで、私は大声を出してしまった。文脈からすると、私の頭には、養子の文字しか浮かばないけれど、もしかして違う意味があるのだろうか。

「そう。つまり君は俺の養女という事。俺がパパで、オクトが娘」何か言いたいが、言葉にならない。

旅芸人から一転。私は知らない間に魔術師の娘にジョブチェンジしていた。

4 - 2 話

「何で？」

養女という恐ろしい話で、脳みそがフリーズした私からようやく出てきた言葉は疑問だった。何を企んでいるのかさっぱり読めない。「ひどなあ。こういう時は、『ありがとうございます。お父様？』」
「だろ？」

ゾワリと鳥肌が立った。

頼むからわざわざ裏声を出してまで娘役の声を出さないで欲しい。一瞬、キモイと面と向かって言ってしまいそうになったじゃないか。

「……どういう意味でしょうか？」

「オクトは頑固だねえ。だから、家族なら敬語はなしだろ。ただし貴族にはそういうのも五月蠅い奴いるから、外ではソレな。俺も一応伯爵家の一員で、子爵の称号は持っているし、今後そういう場所に行く事もあるだろうしね」

伯爵って言った？で、自分自身は子爵？その子供が私？家族？は？
一体、こいつは何を話してるんだ。

「……宇宙人め」

「えっ、宇宙人って何？」

そうか。異界言語じゃ嫌味にもならないか。それどころか、いい情報ありがとうございますか。このやろっ。

「この世界以外の生命体の事。それで、何故私がアスタの子供なん……です？」

「おっ。大分と砕けてきたね。でもそんなに理由が気になるのか。そっちなあ。しいて言うなら、俺が面白いから？」

「……馬鹿？」

本音がぼろつと出てしまい、私は慌てて口をふさいだ。貴族相手に、馬鹿はない。

でもあまりに回答が馬鹿ばかりすぎたのだからしょうがない。面白そうなんて、そんな答えあつてたまるか。これも彼なりの冗談に違いない。笑えないけど。

となれば考えられる理由は……私から情報を取り出して売りさばくなら、使用人よりも養子の方が効率がいいとか辺りだろうか。使用人なら情報に対していちいちお金が絡んでくるが、養子ならばそれはない。

でもホテルすらともに使えないほど嫌われた混ぜモノを養子にするって、リスクの方が大き過ぎるようにも思う。もしも私がそれほど知識がなかったらどうするのか。もしかしてこの世界は養子縁組を組むのも解除するのも、使用人の解雇並みに簡単だったりするのだろうか。

「はいはい。思考の渦に入り込まない。まあ結局はそれが面白いと思った理由だけ。オクトは色々考える生きものみたいだからね。俺は頭使うやつが好きなんだよね。ちょうど結婚しろって言われて、いろいろ五月蠅かったし、いいかなと思って」

「ば、馬鹿か?! そんな理由なら、今すぐ取り消せ」

私との養子縁組を結婚しない理由に使ったら、伯爵様であるコイツの父親に睨まれてしまう。跡取りにもならない混ぜモノ連れて行って『これ俺の娘? だから結婚しない』なんて言い出したら、普通に暗殺されるだろ。不本意な選択だったのに、何でそれが死亡ルート直結なんだ。ありえない。

私は敬語を使うのも忘れて怒鳴りつけた。

「何で。俺の勝手だろ」

「世の中、俺様だけで生きれるほど甘くない。私が跡取りになれるはずないから。私は混ぜモノだ。親の気持ち考えろ」

もしかしたら、こんな怒鳴りつけたら、使用人の話までパーかもしれない。それでも言わずにいらなかった。もうどうとでもなれ

だ。私はまだ死にたくない。

「混ぜモノには違いがないね。あ、悪い。勘違いさせたかな。オクトが継がなくても、俺の息子が継ぐから、窮屈な思いはさせないよ。最低限のマナーは覚えてもらっけど」

……は？息子？

駄目だ。話が分からなくなってきた。結婚しろと言われてるのに、息子がいると言うことは、再婚しろって言われているという事だろう。それで養子を迎えて、黙らせる？黙るはずがない。

「もう少し分かりやすく、最初から説明してもらえませんか？」

私は頭痛がしてきて、頭を抱えた。アスタの行動が意味が分からな過ぎる。

「だから伯爵は俺の息子が継ぐから問題ないんだよ。周りが再婚しろって五月蠅いけど、混ぜモノの親になりたがる酔狂な貴族は少ないからな。小さな混ぜモノの子供が居るって言えば、しばらくは見合いを断れるだろ」

……なんだこの、悪知恵。確かに理由を聞けば、言っている事は間違いない。私にまったく優しくないだけで。

「アスタはいいの？」

「俺はオクトが気に入ったから大丈夫」

利害の一致ってやつね。

そしてアスタはあまり人の目を気にしないのだろう。伯爵は息子に継がせるという事は、貴族の立場もどうでもいいのかもしれない。

「気に入ったのは、異界の知識？」

もうこうなれば、全てぶっちゃけてもらおう。これだけ混ぜモノが嫌われている事をいいように使っているのだ。性格が悪い事は良く分かった。今更取り繕われるより、私がすべきことをしっかり教えておいてもらいたい。

「ああ。それは、どっちでもいいよ。何か知っている事があって、
気が向いたら教えて」

「はっ?!」

どっちでもいい?

取り繕っているわけではなさそうだから、余計にアスタの事が分
からない。思考回路が無茶苦茶過ぎる。

「オクトは難しく考えすぎる傾向があるみたいだね。だからさつき
から言っているように俺は、考える奴が好きなんだよ。異界屋の時
の最後の質問。何で馬じゃなくて車を異界では利用するのかの答え。
あれはオクトが考えたんだろ?」

確かにそうだ。あの世界には馬もいる。でも車が主流になった理
由は、知らなかった。だから今持っている情報で推測をした。

私が頷くと、アスタは楽しげに笑う。

「オクトは頭も悪くなさそうだし、魔術師目指してもらいたいなと
思ってるんだ」

話が見えません。

どうもアスタは色々話を飛ばす傾向にあるようだ。言葉が足りな
いと言うよりも、相手のペースに合わせる事を知らないように思え
る。もしくはその気がないか。

「何故?」

「嫌ならいいよ。でも勉強して、賢くなってね」

「いや。裏の意味なく、普通に疑問」

別に引き取ってもらったのだから、魔術師目指せというなら目指
すし、親の言う事を聞くいい子でいるつもりだ。お父様と呼ぶかど
うかは別として。

「今の魔術師は馬鹿が多いんだ。何にも考えずに、魔法をぶっぱな
せばいいとか思っている奴が多くて、俺がつまらない。魔法は喧嘩

に使うものじゃなくて、もつと頭を使つて原理を解析して、大衆に知識を落としていくべきものだと思つてる。でもそのレベルで話せる奴がほとんどいないんだ」

馬鹿が多いつて……あれは賢い人がとれる職業資格じゃなかっただろうか。一座の魔法使いは、やっぱり他の人よりも頭がよく、まわりを馬鹿にしている節があつた。実際それぐらいの知識差があるのだ。でもそんな奴でも魔術師にはなれなかった。

「オクトなら勉強するうちに分かんと思うよ。そして賢くなつたら、俺の話相手して、研究を手伝う事。うん。それを引き取る条件にしようかな。職業は別に何でもいいよ。ただ魔術師になるだけだと、混ぜモノはその後の就職に苦労するから良く考えてね」

曖昧に私は頷いた。

彼の考えが分かるようになるという事は、私もああいう性悪な思考回路になると言う事だろうか。……それもどうなんだろう。

ただ知識に飢えているのは間違いないので、かなりありがたい申し出だと思う。それにアスタの言う通り、混ぜモノでも生きていくように、ちゃんと今後を考えなければならぬだろう。凄い資格であるはずの魔術師になつたとしても就職に苦労するという事は普通の就職はほぼ絶望的ということだ。本来最低目標である自立が、最終目標並みにハードルが高いなんて……私は前世でそんなに悪い事をしたのだろうか。

今後を思うと、憂鬱になつた。

4 - 3 話

「そっぴゃ、オクトは文字は分かるか？」

人生を夢んでいた私だったが、アスタはそんな事知った事ではないように普通に質問してきた。まあ当たり前なんだけど。

聞かれた質問を少し考えてから、首を横に振る。アスタの言う文字は日本語ではなく、龍玉語の事だろう。なんとか話し言葉はできるが、読み書きはさっぱりである。

「そうか。まずはそこから……。なら数は数えられる？」

「それは多分大丈夫」

一通りの数学基礎は前世の記憶でカバーできるだろう。宇宙人と数学でなら会話ができるとかなんとか言った人間が居た気がするが、確かにその通りだと思った。読み方は変わっても、異世界でも計算は変わらない。0は0だし、1は1だ。

「それができるなら、まずは買い物にいくか」

「へ？」

どんな話の流れだ。

唐突に言われ、目が点になる。この男の動きが全く読めない。何故数の質問がいきなり、買い物につながるのか。

「何事もまずは腹ごしらえから。オクトも食堂でジロジロみられたら嫌だろ。となると、部屋で食べられそうなもの買わないとな。あと服もいるし、洗面用具と……」

「待つて。アスタ、服はある」

「あるつて、どこに？」

勝手に話が進んでいく事に慌てた私は、急いで自分が寝ていた場所から鞆を持ってきた。

「アルファさんがくれた。だから洗いまわして大丈夫——」

「じゃないな。部屋着として着るのは構わないけれど、外に出る時は駄目だから。それと、それっぽっちでいいわけないだろ。行くよ」私の言葉をさえぎって、アスタは否定した。折角アルファさんがくれたものののに……。そんなにみすばらしく見えるだろうか。

混ぜモノとしてさげすまれた時より、なんだか悔しかった。でも引き取ってもらった私に、そんな事を言う資格はないのも分かっている。私は彼に生かされている立場だ。

「金ないから」

だから買えない。せめてもの拒絶で私は言った。

「俺が持つてるから大丈夫。子供に出してもらうほど落ちぶれてないつもりだよ」

ちっ。

表情には一切出さず心の中で舌打ちする。もつとも私に払わせようとしないうちは分かっていた。働く能力がない私を引き取ったのだから、それぐらいの考えはあるはずだ。

「悔しいなら、何も言われないだけの力を付ける事だよ」

バレた？

言われた言葉にどきりとする。不機嫌になってしまった事は極力顔に出さないように気を付けたのに。アスタはすつとしゃがむと、私と同じ目の高さに合わせた。

「俺だつて誰にも何も言われない為に子爵の位をわざわざ貰ったんだ。そしてやりたい事をやる為に宮廷魔術師なんて堅苦しい仕事をしているんだよ。ここでは貴族や王族がルールで、力がないなら彼らの常識に従わなければいけない。好きな服を着て、自分の常識をつきとうしたいなら、よく考えるんだ」

私は頷いた。

貴族に引き取られたならば、貴族に合わせるべきなのは間違いない。それが嫌なら、文句を言われない為にどうしたらいいか対策を練るべきだ。悔しいがアスタの言い分の方が正しい。

そして私の荷物を捨てようしないあたり、彼なりの譲歩してくれているのも分かった。それなのに彼に恥をかかせるわけにもいかない。

「よし、じゃあ行こう。今日はその格好で良いよ。まずは買い物を覚えてもらって、必要最低限のものを買えるようになってもらわないと。しばらくは一緒に、この寮で暮らしてもらうから」

今度は私も反論せず頷いた。ここでは彼がルールだ。

私は歩き始めたアスタについていく。外へ出ると、宿舎の隣に大きな塀があるのが見えた。塀の向こうには、さらにそれよりも高い建物がいくつか見える。初めてみるが、きっとあれは王宮だ。つまりここは王都なのだろう。

「通勤が徒歩1分なのが気に入ってるんだよね。王宮の中にも宿舎はあるんだけど、そっちは逆に近すぎて、何かあるとすぐにいいように使われるから嫌なんだ。最近は移れて五月蠅いんだけど」

「……私が居れば、それも断れると？」

「そう。王宮に混ぜモノ連れこむのは嫌がるだろうし、小さい子を1人で育てているって言えば、無茶な召集もかけられないからね」
なんとなく分かってしまった自分が物悲しい。まあいいように利用してくれていた方が、捨てられない理由になるので、自分としてはありがたいけれど。でも何だろう。話を聞けば聞くほど、自分の人生が無理ゲーっぽく見えてきた。

「……混ぜモノにも、ものを売ってくれるだろうか」

かなり色々な場所で嫌われているこの現状。もしかしたら、最終ライフスタイルは、誰も住んでいない山で自給自足だろうか。でもそれが一番確実な生き方な気がしてきた。

職業農民。うん。いいかもしれない。

「この町の人には金さえあれば何でも売るよ。多少嫌な顔はするかも

しれないけれど、混ぜモノの金も、貴族の金も同じだからね。ただ飲食店は断られる可能性が高いかな。俺と一緒に通してくれるけど」

「アスタが貴族だから？」

「いや、俺が魔術師だから。混ぜモノは忌み嫌われているけど、それは蔑みからじゃなく、恐れからだ。魔術師なら混ぜモノが暴走してもなんとかしてくれるだろうと皆思ってる。もちろん貴族として金をちらつかせても入れるだろうけど」

ふと、何故混ぜモノがそれほどまでに嫌われているのか不思議になった。

私は同じ人がない為、その姿や成長の仕方が不気味に見えるのだと推測していた。また上手く育たない事の方が多いようなので、その脆弱さも嫌われる要因だと思っていた。しかし恐れられるのは差別ともどこか違う気がする。

アスタの歩く速さに置いてかれないよう、小走りになりながら考えるがしつくりとした答えに行きつかない。

「同胞は、一体何をした？」

「そうだなあ。最近あった大きな事件だと、今から100年ぐらい前。黄の大地にある国で、混ぜモノが暴走。結果王都が消し飛んだのかな。これは結構有名だね。もっと昔だと、国自体が一夜にして消えたという文献も残っている」

「は？消えた？」

「そう。混ぜモノの魔力が暴走して、文字通り何も残らなかったらしい。でもそんなに大事になるのは、本当に稀だよ」

……むしろ、そんな事があってよく自分は生かされているなと思てしまった。私の人権は何処に行ったと思ったが、これでも生まれてすぐに処分されないだけ、倫理や人権があったという事だ。

「ただし稀ではあるけれど、混ぜモノが危険だとみなす動きはあったんだ。千年ほど前には混ぜモノ狩りという大きな出来事も起こっ

た。でもそれも今は誰もやらない。何故だと思う？」

「倫理的にまずいから？」

「ハズレ。そっちの方が被害が大きかったからだよ。どうも1人殺すたびに村や町が消えたみたいだね。さっき話した国が消えたというのもちょうどその時代だったはずだよ。狩りに関係しているかどうかは分からないけれどね。とにかく、そんな黒歴史のおかげで今はどの国も混ぜモノには手を出さない」

アスタの言葉に、私は何と言っているか分からなかった。

歩く爆弾がいたら、誰だって避けて通りたいだろう。これで嫌うなんて無茶だ。しかも爆弾を先に解体しようとすれば、さらに大きな被害……何て迷惑な最終兵器。そしてそれが自分だという。

「暴走は、何で起こるの？」

とりあえず、そんな大迷惑な死に方だけはしたくないと思った。

「さあ。今もまだ研究段階だね。データも少ないし。良かったらオクトも研究するといいいよ。今のところは精神と密接な関係があるんじゃないかとされてるかな。百年前の事件は結構情報が残ってたから」

研究するといいつて、自分自身ですか？いつ爆発するかもしれないのに、怖すぎるわ。なにその迷惑な自虐。

ただツッコミ入れるよりも、話の続きの方が気になるので私は黙って聞く事に徹した。

「あの事件は六番目の王女が王位継承するのを兄王子が阻止しようとして、混ぜモノを使って暗殺を図ったのが発端らしい。その時混ぜモノは恋人を人質に取られて無理やり従わされていたそうだし、しかし事故か自殺かは定かではないが人質は死んでしまい、その後暴走が起こっている。そこから感情の高ぶりが暴走引き起こしているのではないかと仮説がたてられているんだ」

……大切な人が死んで、感情の高ぶり。

あれ？それって、もしかしたら、つい最近起こっていませんか？

その事実に行きついた時、頭から血の気が一気に引いた。

百年前の話は私という自我が目覚めた、母親が死んだあの時の状況にとっても酷似している。今思えばクロのおかげで私は暴走を踏みとどまれたんじゃないだろうか。クロがいなかったらと思うとぞつとした。

クロ、マジ勇者。二度と足をクロの方に向けて眠れない。

「ありがとう。よく分かった」

とにかくまずは、自分の感情コントロールを確実にできるようにしようと心に誓った。

5 - 1 話 危険な外出

アスタに一通り買い物方法を教えてもらった私は、その後料理を始めとした家事のすべてを請け負った。

というか、それぐらいしかやる事がないのが現実だ。

「暇……」

私が外出するのは買い物ぐらいである。他に遊びに行きたい場所もないし、そもそも出かけたくない。それならば室内で遊べばいいのだろうが、どう遊べばいいのかわからなかった。一座にいた時はとにかく雑用を買って出て、暇になればクロと遊ぶか、アルファさんや団長にこの世界の事を色々聞くかしていたのだ。自分の時間というもを持つのは初めてだった。

前世の知識に頼ると子供の遊びと言えば、ままごとや人形遊びなのだが、さすがに今更する気も起きない。むしろ自分がやっている姿を想像するとうすら寒い。結果やっぱりやれる事なんて家事ぐらいだった。

もちろん1日中家事をするわけにはいけないので、それ以外の時間は文字の練習をしている。アスタから文字の基本を教わったので、それを元に最近はイラストの多い本を読みあさっていた。幸いこの家は、本だけは必要なくらい充実している。魔法や異世界に関する本が多いが、それ以外も結構あった。アスタはきつと活字中毒者なのだろう。

とにかくアスタに育児放棄されていると言っても過言じゃないくらい放置されている為、私は自由な時間を持て余していた。本を読むのは嫌いではないが、そればかりでは流石に疲れる。テレビもラジオもゲームもないなんて、なんてニートにつらい世界だろう。

「あー……小麦粉がないそう」

台所の棚を整頓しながら私はばやいた。この量では明日の朝食のパンケーキ分ぐらいしかない。ちょうどパンや麺も切れているし、そろそろ買い出しが必要だ。

来たばかりの時は本の森と化していた台所だが、今は私の努力の結果、調味料も並びきっちり使えるようになっていて。水道も完備されていたので共同の井戸を使う必要もなく、その点は本気でありがたい。「ベーコンとか、野菜もそろそろ買わないと」

時間は有り余っているので、買い出しくらい余裕だ。暇もつぶせる。それでもできれば外出したくなかった。ジロジロ見られるのも嫌だし、あまり歓迎されていないのもよく分かる。

できる限り最低限の買い物で済むように、私は必要なものを紙に書き出した。

「せめて冷蔵庫があれば、もう少しまとめて買いだめできるのに」魔法でも電気でも何てもいいので、誰か作ってくれないだろうか」と本気で思う。夏場とか、ほぼ毎日買い出しに行くのかと思うと憂鬱だ。冷蔵庫が無理ならネットショッピングでも良い。とにかく家から出たくない。……だんだん発言が二トどころか、引きこもりになってきている気がするのがちょっと嫌だ。

とはいえ、嫌だ嫌だと言っても、誰かが変わってくれるわけではないので私は鞆を手にとった。

「今日も何もありませんように」

私は返しそびれたクロのサインを取り出すと手を合わせて祈った。最近はお出前にそれが日課になっている。混ぜモノの力が暴走しない為に精神統一しようと考えた結果こうなった。外の世界マジ怖い状態なので、とにかく心のよりどころを作って、安定を図っている。

「本当に、本当に、何もありませんように」

パンパンと最後に柏手をうち、サインをカバンの奥底へしまふ。

なんとか気持ちを切り替えると私は外へ出た。

宿舎のはずだが、私は一度も誰かにあった事がない。まるで私とアスタしか住んでいない気がするが、時折隣の部屋からよく分らない音が聞こえたり、反対側から不気味な声が聞こえたりするので、人が住んでいないわけではないと思う。会わない理由は私が外に極力出ないようにしている事と、きっと活動時間のズレの為にただできる事なら、そんな奇怪な音を出す隣人とは会いたくないなと思っている。

「駄目だ。思考がどんどん駄目人間になってる」

隣人には笑顔で挨拶。助け合いが大切だ。それなのにできる限り、顔を合わせないようにしようって、完璧引きこもりの思考である。これではいけない。

一座にいた時は仕事と割り切れば人目もそれほど気にならなかったのだが、人に会わなくても済む生活をしていると、どんどん億劫になっていく。

「行こう。とにかく、早く済ませよう」

買い物には行くのだから引きこもりじゃないと自分に言い聞かせ、商店街へ向かう。その途中、すれ違う人に必要以上に大きく避けられ、さらに離れた場所にいる人からは、遠慮ない視線を貰った。

「フードが欲しい」

平日の為人通りはまばらなのだが、早くもめげそうになった私は小さくぼやく。顔を隠してしまいたかったが、アスタはその手の服や小物は買ってくれないのだ。ドレスはボンと一括払いで買ってくれるのにと恨めしく思う。

とはいえ今日はドレスではなく、シャツにズボンと男のような格好をしていた。楽なのでよく着るのだが、この服自体は1人で歩く時に貴族の女性の装いをするのは危険だろうとアスタが買ってくれたものだ。……ただ顔を隠さない限り、例えばドレスを着ていたと

しても何も危険はないように思う。誰ひとり近づく人が居ない為、スリの心配すらない。流石混ぜモノ。嬉しくない天然の防犯だ。

「……もしかしてそれを狙って、買ってくれないのかも」

とても合理的のようだが、財布は鞆に入れるのではなく、首から下げ服の中に入れるという対策しているので、スられるなんて事ない。

ため息をつきつつも、パン屋で食パンをかうと、私は八百屋に向かう。初日にアスタと一緒にまわった場所な為売ってくれないという意地悪もされない。

「おや、アスタ様のところの混ぜモノじゃないか。今日は何を買うんだい？」

八百屋につくと、店の親父が気さくに声をかけてきた。アスタと元々知り合いだったらしい、狐耳のの獣人は、私を怖がるそぶりを見せた事がない。きつと類は友を呼ぶで、アスタの知り合いだから少し人と違う思考をしているのだろう。

「キャベツとニンジン2本。じゃが芋2個。キノコ3個。あとオレンジ2個」

「玉ねぎはどうだい。今が旬だよ。薄暗い所に上にぶら下げておけば、長持ちもするぞ」

長持ちするのか。だとしたら買っても大丈夫だろう。2人暮らしで、しかも私がそれほど食べない為、食材は使いきれなくなってしまう事があった。

「ならそれも。後できたら、キャベツは半玉か4分の1玉で売って欲しい」

「はあ？何でまた。金はあるんだろ」

「私とアスタだけじゃ、食べきれない。値段は少し割高でも、量を少なく売ってくれるとありがたい」

「なるほど。一人暮らし用かあ。よし。お前さんに言われた通り、食べ方や保管方法を教えながら売ったら客も増えた事だしな。キャ

ベツは半玉、おまけしてやるよ」

ありがたいので私は素直に受け取っておく。貴族のくせにと言われるかもしれないが、不必要なところでお金を使う必要はないはずだ。それに貴族であるのはアスタだけで私は違う。身の丈に合った生活をしていくべきだろう。

「ありがとう。あとは食べ方は口答だけでなく、紙に料理の作り方を書いて配るとより親切で、購買欲が上がると思う。イラストが入っているとなおいい」

「紙を配るのかあ。ちよつと考えてみるよ。それにしてもアスタ様が言った通り、本当にお前さんは賢者様だな。よくそれだけポンポンアイデアが出るよ」

「賢者は言い過ぎ」

むしろ恥ずかしいので止めて欲下さい。

今おじさんに教えた事は、私の純粋なアイデアではなく、前世のスーパーを思い浮かべたに過ぎない。

買い物袋に一通り荷物を入れると、かなり重たくなった。このまま連続で他の店にも行ってしまうところだが、私の腕力は5歳児と同じだ。たぶん持てなくなるのが目に見えるので、一度荷物を置きに引き返すことにする。私はぺこりと店主に頭を下げた。

「アスタ様によろしくな」

私は頷くと、小走りに来た道を戻る。

コンパスの短い脚では、歩くのにも時間がかかった。早く大きくなりたい。しかしエルフは成長が遅く、精霊は心の成長に合わせて一瞬で成長すると本に書いてあったので自分がどのタイプになるのかは運まかせだ。せめて体は子供、頭脳は大人な状態だけは、マジ止めて欲しい。

「考えるの止めよ」

外に出るとナーバスになるので、思考が悪い方ばかりに向かってしまう。とにかく早く買い物が終わらせて、家に引きこもるのが一

番だ。

「そういえば……」

ふと商店街の途中にあるわき道は、宿舎への近道ではないかか
と気がついた。若干薄暗いが、私なら誰も近づいてこない
ので、危ない事もないだろう。

早く帰りたいしな。

私は急がば回れという言葉にあえてふたをして、わき道に入
った。

5 - 2 話

何故、あの時わき道に入ってしまったのだろう。

「はあ……」

私はいく度目かになる深いため息をついた。ため息をついても、牢屋のカギは開いてくれないけれど。私より少し離れた場所からはしくしくと鳴き声が聞こえ、とても辛気臭い。

急がば回れ。何故あの時そうしなかったのか。数時間前の自分を罵ってやりたいが、後悔先に立たずだ。私は人攫いに攫われるという失態を犯してしまった。

もちろん混ぜモノである私が積極的に攫われるはずもない。あの時近道だと思った道の中には人攫いにあっている女性がいた。そしてそれを目撃してしまった為に鳩尾に一発拳を入られたのだ。その後気が付いたら牢屋で転がっていたわけだから、確実に巻き込まれただけだろう。

どうせなら昏倒した後は、そのまま捨てておいてくれてよかったのに。私なんか攫っても何の役にも立たないはずだ。むしろ相手も扱いに困っているように感じる。遠くでこそそそと、話しあっているのを聞いてしまった。

「はあ」

まわりをちらりと見れば、一緒に攫われたはずの人達がビクリと肩を揺らした。私も被害者なんだけどなあと思わなくもないが、私が混ぜモノである事を考えれば仕方がない気もする。誰だって、爆弾と一緒に閉じ込められたくないだろう。一緒に助かる為に頑張ろうと慰め合うなんて、夢のまた夢だ。

「というか、私が暴走したらどうするつもりだったんだろ」

そう考えると、さらった相手は、それほど頭がよくないのかもしれない。少なくとも混ぜモノの知識は薄いのだろう。知っていたら私はこんな目にあわなかったはずだ。

「アスタ、探してくれるかな」

まだ連れ去られた事に気が付いていない可能性もあるが、それ以前に気がついて探してくれるかどうか分からない。数週間一緒に過ごした仲ではあるが、私とアスタは赤の他人だ。面倒だと思えば、何もしないかもしれない。ニート生活な私が、それほどアスタの役に立っているとも思えない。

そう考えると自分で何とか脱出する方法を考える方が賢明だ。

入口は鉄格子となっており、南京錠でドアは止められていた。窓は部屋の中に一つだけしかない。しかも私ですら通れるかどうか微妙な大きな上、かなり高い場所にあるのでそこから脱出は難しいだろう。また牢屋は薄暗く、光は牢屋の向こうにかけてあるランブだけだ。

「おい。飯もつてきたぞ」

声の方を見れば、鉄格子前に12、3歳ぐらいの少年がいた。段ボール箱を抱えた少年は、ニツと歯を出して笑う。バンダナから赤茶の髪を覗ぞかせてたその顔はまだあどけなさを残している。それでも彼もまた人攫いの一味だ。私は注意深く少年を見つめた。これぐらいの子だったら上手く出し抜けるかもしれない。

「俺だったらなんとかなるかもなんて思っても無駄だからな。ここには、俺以外にも仲間が居るから簡単に外には出られないぞ」

私の考えている事がばれたのかと一瞬思ったのだが、全員に対する忠告だと気がつきこっそり力を抜く。この少年なら何とかなるかもと、皆考えるのだろう。

「パンと水を配るから並べ」

鉄格子の向こうから少年が声をかける。しかし誰1人として動くとしなかった。

「まあ1日や2日食べなくても死なないから、俺は構わないんだけどな。いざ逃げたくても動けないって方が俺的には助かるし」

ニヤニヤしながら少年がいうと、誘拐された人たちはひそひそと相談し始めた。そして1人が立ち上がると、釣られたように1人、また1人と立ち上がり、少年からパンと水を貰って行く。全員が貰い終わったところを見計らって、私も立ち上がった。

「あんたが最後か。って、ちっさ。何？ママと一緒に攫われたのか？」

私は少年の言葉に首を横に振った。

「そっか。普通はそんなに小さい奴は攫わないのに。あんた運が悪いなあ。しかも混ぜモノの男かよ。あいつらどうするつもりだ？」

本当にその通りだと思う。私を攫っても風俗に売りつける事は出来ないし……と考えたところで、自分の恰好が男である事を思い出した。まわりを見ると女性しかいないので、この少年も私が巻き込まれたのだと考えたようだ。

「混ぜモノならあいつらも下手に殺す事だけはないと思うから、安心しろよ。ほら、パン食べな」

おしつけられるようにパンを渡され、私は頷いた。少年もおびえた様子がないので、私はその場に座り込むとパンにかぶりついた。食べれるときに食べなければという習慣が身についている為、どんな時でも食べられないという事はない。

「いい食べっぷりだな。そんなに、腹減ってたのか？」

私はコクリと頷き、水を口に含む。生ぬるかっただが変な味はしなかったので、ありがたく飲み込んだ。その様子を少年は立ち去らず、ニコニコと見つめる。

それにしてもこの少年、一体どんな立場なのだろう。パンの渡し

方等考えると、結構頭がいいように感じる。脅すわけではなく、食べる事が正解だと全員に思わせる言葉回しだった。もしあそこで、暴力に訴えたら、誰も彼に近寄らず、パンを食べなかったに違いない。まさに北風と太陽だ。

「俺はライ。アンタ、名前は？」

「……オクト」

喋れない設定でいつて油断させても良かったが、私の場合出し抜くよりも、何か交渉した方が家へ早く帰れる気がした。交渉の為に言葉が必要なので喋れない設定はむしろジヤマだ。

「何だ喋れるのか。お前、親はどうした？」

「いない」

アスタが脳裏に浮かんだが、素直にそれを言う必要はない。本当の親はいないのだから嘘でもないわけだしと自分に言い聞かせる。

「ふーん。結構いい生地を着たし、どこかの酔狂な貴族の下働きでもしているのか。ちっさいのに大変だな」

……怖ッ。

服の生地から一瞬で本当に近い答えを導き出された私は、内心冷や汗をかく。流石に貴族に引き取られたとは思わないだろうが、貴族と繋がりがあると分かれば何か交渉材料になるかと思われそう
だ。

「ライは、何している？」

「俺？俺は泣く子も黙る海賊だよ」

話を変えようと出した話題だが、あっさりこの集団が何かを教えてくれた。頭がいいと思ったのだけど、そうでもないのだろうか。もしかしたら私が幼児だから油断しているのかもしれない。

だとしたらチャンスだ。

「海賊？」

「そう。海にいる荒くれ者さ。でもソレばっかりでもやっていけな

いから、たまにこうやって陸に上がって、裏の仕事も引き受けるわけ」

「裏の仕事？」

「若い娘が欲しいんだってさ。その後どうするかは俺も聞いてないけど」

奴隷か何かだろうか。女性に限定するなら、性的な可能性も高い。……どちらにしろ、私は完璧にとばかりを受けた事には変わらない。

「おい、ライ。飯を配ったら、病人の世話に戻れ」

「はいはい。今行くよ」

ここからは見えないが、仲間が近くにいるのだろう。声がよく聞こえた。確かに少年を何とかしても、ここから抜け出すのは難しそうだ。

「病人がいるの？」

「ああ。海の精霊に好かれちまうとなる怖い病気だ。といっても精霊相手に俺らは何もできないしな。看病って言っても飯を持ってくるだけだよ。長く航海をしてとなるけれど、陸に戻れば治るやつもいるし」

「海に精霊？どんな人？」

私も精霊族の血が入っているはずだ。海にいるなんて初耳だ。

「さあ。姿が見えないから精霊なんだし」

……精霊って何者？姿が見えないなら、どうやってママが生まれたのか。ただ確かに今まで精霊族の人とはあった事がない。もしかして見えないだけで、結構すれ違っていたりしたのだろうか。

「病気はどんなの？」

「お前質問はぼんぼん喋るんだな。まあ、いいけどさ。海の精霊に好かれた奴になるだけで、うつる病気じゃないから安心しろよ。ただ壮絶だぜ。歯茎から血が出て歯は抜けて、全身に青あざができるし。そんでもって酷い場合は死んじゃう」

あれ？

海賊と青あざ。航海が長いとかかるという話。そこから私は精霊が引き起こすのではない、別の病気が頭に浮かんだ。異世界なので前世と同じとは限らない。しかしこの世界の食べ物、とてもよく似ている。

「じゃあ、俺行くから。大人しく今日は寝ろよ」

「待つて」

立ち去ろうとするライを私は慌てて呼びとめた。混ぜモノの私を怖がらず、普通に話してくれる貴重な人材だ。明日も彼が来るか分からないのだから、交渉するなら今しかない。

「その病気、私なら治せる」

失敗したらもつととんでもない事になるかもしれない。しかしこのまま何もしなくても事態が好転しないと踏んだ私は賭けにでる事にした。

5 - 3 話

カッソ。

歩きかけていた足を止め、ライは私を振り返った。透き通るような琥珀色の瞳が私を映す。何の感情も見えない瞳をまっすぐ向けられ、私は逃げ出したくなった。タイミングを間違えたかもしれないと一瞬後悔するが、何とか踏みとどまる。

「本当か？」

「……本当」

ビビった所為で、少し反応は遅れてしまったが、ライは牢屋の前に戻ってきてくれた。

「逃げる為に、嘘つくとか大変だぞ。ここにいたら、少なくともオクトは何もされないんだからな」

確かに何もされないだろうが、何もされずにこの牢屋に一人取り残された方がもっと怖い。海賊たちは混ぜモノについてあまり知らないようだし、取り残された恐怖からバッドエンド直行になるかもしれないなんて考えてもないだろう。自分の手で殺さなければいいとか思っていたらアウトだ。

「治せるよ」

「なんでそんな事知ってるんだよ。誰にも治せない、奇病なんだぞ」
「……死んだママに聞いた」

私は嘘がばれないように下を向いた。悲しくてうつむいたと思って貰えるように言葉を選ぶのも忘れない。ここで前世の知識からとか本当の事を言ったら、頭の可哀そうな子認定までされて、2度と話を聞いてもらえないだろう。

「ふーん。それが本当なら、オクトのママは何者だよ」

「知らない」

私が聞きたいくらいだ。死ぬ時も何も残さず突然目の前で消えるとか、普通じゃありえない死に方だった。それに目に見えない精霊が親とか、意味がわからない。無事帰れたら、アスタに色々聞こうと思う。あれだけ本を読んでいるのだから何か知っているはずだ。「分かった。信じるよ。で、どうやって治すんだ？」

「取引したい」

ここからが本題だ。私は震えそうになる手を握りしめ、顔を上げた。ここまできたらもう逃げられない。後はライに騙されないようにして、確実な交渉をするだけだ。

「それは俺と？」

「違う。海賊の一番偉い人」

人攫いをするぐらいだから、正義の味方みたいな海賊ではないのは確かだ。約束もちゃんと守ってくれるとは限らないのも分かっている。それでも、まずは話をしなければ進まない。

「それだけの価値がある情報だと思う」

海の精霊に好かれた呪いだと思われる奇病。そう思っている限り、きつと治す事はできないだろう。多くの船乗りの命をこれまでに奪ってきて、これからも奪っていくはずだ。

船長とてこの病気にかからないとは限らなければ、その治療法は喉から手が出るぐらい欲しいはず。

「ま、そうだな。その話が本当なら、船長も会うだろ。分かった。連れてってやるよ。ちよつと待ってる」

ようやく見せてくれた笑顔に、心の中でそつと胸をなでおろす。怖かった。

ライは一度その場を離れたが、すぐに鍵の束を持って現れる。思ったより近くに鍵があったのか、誰かがもっていたのだろう。そのカギを使い、南京錠を外した。

「来いよ」

「どけえええっ!!」

さしのばされた手を取ろうとした瞬間、ライの方へ向かって女性が叫びながら走ってきた。ライよりも大きな背丈なのでそのまま体当たりすれば、ライは吹き飛ばんじやないかと思う。外に仲間がいるって分かっているはずんだけどなあ。

それでも逃げられると、彼女は踏んだのだろう。しかし次の瞬間、女性の顔は驚愕に代わり、体が宙を飛ぶ。バシンと音がして地面にたたきつけられた事に気がついた。

「ちよつと、傷つけるなって言われてるんだから、無駄な努力とか止めるよ。怒られるだろ。どうしても言うなら仕方ないけどさ。言っておくけど俺一般人に負けるほど弱くないから」

にやりと笑って、ライはパキパキと指の関節を鳴らす。誰もが状況についていけず、啞然としていた。それは私も同じだ。体格から考えると、女性が吹っ飛ばなんてありえない。

「じゃ、オクト行くぞ。ちなみに逃げようとしたら、アレだから」
地面にたたきつけられたまま動かない女性を指差されて、私は慌てて頭を上下に振った。そもそも私の体重から考えると、あの女性よりももっと軽々と吹っ飛ばす事ができるだろう。そしてライは女性とか子供とかが理由で手加減なんてしてくれそうになかった。

私は立ち上げると、牢屋のドアを潜る。もう誰もこちらへ近づこうとしない。皆こちらを注目しているが、逃げる気は失せたみたいだ。それでもライは私が外に出ると、南京錠を再びつけた。
「こつちだ」

歩いていくライの後ろを小走りでついていく。

「おい、何勝手に混ぜモノを外に出してるんだよ」

階段近くまで行くと、縦にも横にも大柄の男がギロリと睨みつけてきた。座っているはずなのに、ライがまるで小人のように見える。「あんたらだって、どうしたらいいか困ってただろうが。俺の方が混ぜモノの事を知ってるから、面倒みるように言われたの忘れたのか？」

「ふん。そんな小さな混ぜモノなら、殺しまえば楽なのによ」

待て待て。何いきなり、死亡フラグ立ってるのさ。しかも殴り殺させそうになったら、絶対暴走テロ自殺間違えないから。私平然と殺される自信ないから。この脳みそ筋肉族め。私はライの服の裾を掴んで後ろに隠れた。

ライも怖いけど、少なくともライはいきなり私を殺そうとしたりしない。

「だからアンタは万年下っ端なんだよ。混ぜモノはどれだけ小さくても殺すな。そんなのどこの国も知ってることだろ。馬鹿なの？死ぬの？」

「待てよ」

「俺、今から船長のところ行くんだけど」

階段をのぼりかけたところで、肩を掴まれたライは面倒くさそうに男を見た。

「それとも何？アンタを倒してからしか行けないようになってるわけ？」

「いや。……行けよ」

睨まれた男は顔を悪くすると、ライから手を離れた。大きな男が一回り以上に小さな少年を怖がるのは、何だか不思議な光景だ。ただライはさも当然のように、その横を通り抜けた。

「俺最近一味に入っただけだし、入団試験でこのNO3を倒しちゃったんだよ。だからあいつビビってるわけ。あんなデカイ形してるのに、笑えるよな」

どうやら私が不思議そうにしていたから教えてくれたみたいだ。

でも私は笑えない。自分より体格のいい相手をやすやすと倒すなんて、まるで漫画の主人公みたいな奴だ。正直関わりたくない。

それにさっきの話から察するに、最初から私があの手屋にいる事が分かっていて近づいてきたという事だ。パンを配っている時は、さも今知りましたという顔をしていたのに。やっぱり信用はしない方がいい。うん早々に彼とはおさらばしよう。

「私の荷物、何処？」

「何で荷物？逃げないならいらないだろ」

「必要だから」

嘘ではない。治療に必要なのは買い物で買ったものだが、私が本当に必要なのは最初から持っていた鞆の方だ。あの中には、クロのサインも、携帯電話も入っている。置いていくわけにはいかない。

「分かった。確か一か所にまとめてあったはずだし、まだ売られてないだろ」

階段を登りきると、窓があった。どうやらすでに夜になってしまったようで、外は真っ暗だ。何があるかよく分からない。

せめて私が連れ去られた場所から近いのかどうかだけでも分かればよかったのに。無事ここから出る事が出来ても、帰れるかどうかも問題だ。私では馬車とか門前払いされる可能性が高い。

「おい、オクト。どれがアンタの荷物？」

考え事をしている間に、荷物置き場についたようだ。薄暗い部屋の中に、ごちゃごちゃと色んな荷物が押し込められている。鞆以外に置物などがあるが……全部盗品だろうか？統一感が全くない。

「これ。あとこの買い物袋もそう」

律義に拾ってもらえたようで、私の鞆と買い物袋は同じ場所に置いてあった。鞆を首からかけ、両手で野菜たちを持ち上げる。

「ふーん。これが必要なもの？まあいいか。貸せよ」

ひょいと私から荷物を取り上げるとライはすたすたと出口へ向かう。

「取引したいんだろ？早く来いよ」

親切？

女の人でも投げ飛ばしたりと容赦なくせに、行動がよく分からない。重い荷物を持たせると、ただでさえ歩きが遅いのが、もっと遅くなると思ったのだろうか。

まあ案内してもらったまでの付き合いだし、どちらでもいいけど。私は置いていかれないよう、小走りでライを追いかけた。

6 - 1 話 嘘つきな海賊

「船長入りますよ」

ライはノックし、ためらうことなく開ける。うん。緊張しているのは私だけと分かっているのだけど、もう少しゆっくり開けて欲しかった。

あの後さらに階段を上った私は、船長のいる部屋の前にいた。1階なら窓から逃げられるけれど、3階から飛び降りる勇氣はない。何かあったら、大人しく観念して、心の中で般若心境を唱えよう。死にたくないけど、暴走の末に死ぬのはもつと嫌だ。

「なんだ、ライか。どうした」

どうやら酒を飲んでいたようで、部屋の中に入るとアルコールの臭いが鼻を突く。船長は獣の特徴や長く尖った耳や紅い目をしていないので、たぶん人族だろう。黒髪に黒目とクロと同じ色だ。若いのか若づくりか知らないが、ロン毛を後ろで一つに束ねている。30代又は40代くらいだろうか。

「さっき俺が担当する事になった混ぜモノなんだけど、なんか面白い事知ってるんだって」
「ほう」

黒い目が興味深げに私を映す。その目は私の中に詰まっているものを見透かそうとしているように思えた。正直、もつと単純馬鹿な人を想定していたので冷や汗が出る。何で筋肉馬鹿の上司が狡猾そうなのだろう。こういうのは、NO.2とかで、船長は強いけどちよつとお馬鹿とかそういうものじゃないの?!……漫画の読み過ぎですね。すみません。

「オクト。アイツが、この海賊の船長。ちなみに魔法使いでもあるから、嘘とか止めた方がいいぞ」

大きな声で説明ありがとう。もう逃げたい。

だから何で船長が魔法まで使えるチートなわけ？そういうのは部下に任せろよと思うが、もし彼がNO.2だとしたら、どうして船長やらないんだろうと思ったはずだ。

それにしても夜なのに船長の顔が見えるぐらい部屋の中が明るいの、多分魔法の力だろう。簡単な魔法なのかどうかは分からないが、そんなに力を見せつけなくて欲しい。

「初めまして、混ぜモノのお嬢さん。俺はネロだ」

「えっ。アンタ、女?!」

「そんなことも分からないのか。男なら、女ぐらい見分ける」

それは無理だと思います。

自分で言うのもなんだが、5歳児の体はつるぺたなので男の服を着れば男にしか見えない。むしろ分かるネロの方が怖い。子供に女も男もないだろうに。これ以上無駄話の所為で、私の氣力をそがれたくないので、早々に話を切り出す事にした。

「私はこの海賊で起こっている奇病の治し方を知っている。取引したい」

ネロの顔が楽しげなものになった。5歳児が取引したいなんて微笑ましいなあと思ってるならいいのだが、何となく面白い玩具みつけた と思っ て そうな笑みに思えた。嫌だ、この人マジ怖い。そういうえば、アスタと最初にあつた時も凄く嫌な奴認定した覚えがある。魔法関係者はきつと頭がどこかおかしいに違いない。

蛇に睨まれた蛙のごとく、目がそらせない。嫌な汗が背中を伝う。

「ほう。あの呪いを解く方法を知っているのか。あれは魔術師でも解決できない奇病なんだがな」

「魔法は使わない」

それは解決させようと魔術師に無理やり協力させた結果なのか、一般論なのか気になる所だが、精神安定の為私は貝になる事にする。

「薬師も同じだ。治療薬らしいものを作らせたが、効いたためしがない」

「く、薬もつかわない」

作らせたという言葉に不穏なものを感じて、言葉がどもってしまふ。アスタは嫌なやつで済んだけど、この人は怖い。考えるな考えるなと呪文のように心の中で唱える。薬師がどうなったかとか、今後の参考の為としても、聞くべきじゃない。

「まあ奴なりに頑張ったようだから、薬師は奴隷商に売り飛ばしてやったはずだ」

何故、それを今教える。そしてそれは全然慈悲じゃない。なんだ、殺されないだけましだろってか?! 奴隷って最悪じゃないか。怖いよ。怖すぎるよ。私はライの服の裾を握り後ろに隠れた。

取引しようなんて馬鹿な発想でした。すみません。逃げていいですか?

「船長。混ぜモノをあまり苛めないでよ。精神が不安定になると暴走しやすいんだから」

「だから鍛えてやってるんじゃないか。そんな小さな形で取引しようとかここまで出向いてくれた褒美だ。俺なりの好意だからありがたく受け取れ」

いらんわ、このドSめ。そんな褒美、不燃ごみに出してしまえ。

早くアスタの家に帰って、引きこもりたい。……でもその為には逃げなければ。だけど普通に逃げられなければ、取引するしかない。あと少しの我慢だ。頑張れ私。

意を決してもう1度ライの後ろから前に出た。

「私が売りたい情報は、奇病の治療法。それと航海中に奇病を発生させない方法の2つ」

「えっ?! 治療法だけじゃないのか?」

ライの素っ頓狂な声に私は頷いた。その様子からすると、本当に

奇病の治療法は見つかっていないのだろう。後は私が想像している病気と同じである事を祈るのみだ。

「それでその情報と何を引きかえたいんだ？金か？」

私は首を横に振った。金はあるにこした事はないだろうけど、アスタに養われている今はいらない。今後貯めるにしても、できるだけ危険な橋を渡らなくても済む方法にしなければ、また同じような目にあう気がする。

「1つは、私を無事に家まで返して欲しい。もう1つは、今捕まっている女性の解放」

情報は2つ。条件も2つ。情報を考えれば、こんな条件なんてお釣りがくるぐらい些細なものだろう。さあ領け。ほら、領け。……マジで領いて下さい。お願いします。

「今捕まっているだけでいいのか？」

「うん。解放するのは、私が捕まっけてその上で取引をした事を知っている人だけでいい」

船長の言葉に私は領いた。正直、正義の味方にはなる気はない。

むしろ助けて欲しいのはこっちの方だ。ただし恨まれる悪役にもなりたくない。ただでさえ混ぜモノは嫌われているのに、ここで恨みまで買ったら、いつか暗殺バットエンドが待っているかもしれない。そういう危ない芽は早めに摘み取ってしまうべきだ。

ベストは毒にも薬にもなりそうにないと、放っておかれるようになる事。それは今後の努力次第でできるはずだ。

「ふーん。それだとこちらがお釣りが出そうだな。他に希望はないのか？」

……意外に公正な取引してくれるんだな。

人攫いをするぐらいだから、極悪非道には間違いないはずだ。実はいい人って事もないだろう。ドSだし。もしかしたら取引する事に何か信念があるのかもしれない。

「また考えておく」

下手に条件を増やして、最初の条件が消されたら困る。特に何かしてもらいたい事はないので、このまま消えても問題ない。

「分かった。取引に応じよう。うちの船員の病状が回復したら、そちらの条件を叶えると言う事でいいか？」

まあ教えてすぐに、はいさよならはできない事は分かっていた。すぐに治療が完了するわけでもないので、長期戦は覚悟の上だ。私は頷く。

「ではまず、治療法を教えてください」

「……その奇病の名前は『壊血病』。ビタミンCの欠乏により、タンパク質組成であるアミノ酸の1つが上手く作れなくなる。結果、血管の損傷などにより死にいたる」

「ちよつとまで。一体何語話してるんだよ」

……何語って、何語だろう。基本は龍玉語だが、固有名詞は日本語だ。こちらの言葉であてはまるものを知らないのだから仕方がない。もしかしたら、まだその単語は生れてない可能性もある。そうするとやはり日本語を使わなければ説明できない。どうしよう。

「つまり、ビタミンCとやらを補えば、この病気は治るといふことか」

ネロの言葉に私は頷いた。そうだ。細かい話は抜きにして、とにかく治療方法だけ教えればいいのだ。この船長ドSで怖いけど、魔法使いだから頭はいい。拙い説明でも何とか理解してくれるはずだ。「この病気は、干し肉などにはない栄養、ビタミンCの不足が原因。ビタミンCは野菜や果物に多く含まれている」

「なら果物のジュースとか野菜スープを飲めばいいわけ？」

「ビタミンCは熱を加えると壊れる。だから私は生のサラダやジュースでも、絞リたての方が効果的だと思う」

確かビタミンCは酸化も早かったはずだ。また水に溶けやすい原理を使って、ジュースとかの保存料に使われていた記憶がある。と

り過ぎは結石を作るが、食べ物から摂取するだけならとり過ぎほど食べる事はない。なのでとにかく食べる方式で大丈夫だろう。

「よし。分かった。今から、オクトを料理長に任命してやる」
「は？」

「ようは食べ物を改善すればいい話だろ。働いた分の給料も出してやるから、しっかり働け。上手く治ったら、航海中にならない方法とやらも聞いてやる」

かなり上から目線だが、何とか合格ラインに立てたらしい。まだ安心するのは早いと分かっているが、ホッと息をはく。

でも料理長はまずいよな。私の腕はそれほど良くないし、その上身長は足りないし、重たいものとかも持てない。できないづくして涙が出そうだ。

あと少し頑張ろう。私は船長の説得を引き続きする事にした。

6 - 2 話

「先生。ベーコンはこれでいいですか？」

フライパンの上でカリカリに焼かれたベーコンを見せられ、私は頷いた。おいしそうな香ばしい臭いがする。

「先生。キウイ輪切りにできました」

「ありがとうございます」

私は頷きながら、内心ため息をついた。先生ってなんだ。私はそんなものになった覚えはない。笑顔の海賊たちに若干引き気味になりながらも、私は皿に料理を盛り付けた。本日の朝食は鶏肉のオレソージソース煮とパン。カリカリベーコン入りサラダにじゃが芋のスープとキウイフルーツ。朝からヘビーだが、海賊たちはこれらをペロりと平らげる。2食しか食べないのに運動量が半端ないのだからと理屈としてはかっているが、見ているだけで胸やけしそうだ。ただし料理長に相談の上で、私が立てた献立なのでその感想は胸にしまっておく。

私自身は、サラダとスープと一口分のパンだ。アレは無理。

「いやー、すごい。先生の料理は本当に独創的だな」

「はあ」

「褒めてるんだから、もっと喜べって」

1 回りどころか、3 回以上年と体格がかけ離れた調理長に背中を叩かれ、危うく椅子の上から落ちそうになる。独創的って褒め言葉だったのか。

「いや。作れるのは料理長のおかげ」

「よく解ってるじゃないかっ!!」

バンバンとさらに背中を叩かれ、私は椅子にしがみついた。大人と子供の力の違いにそろそろ気がついて欲しい。

「痛いから止めて。でもこれも、そろそろ終わりか……」

怒涛の日々を思い返せば感慨深い気持ちになる。よく生き残った。

2週間ほど前に船長に調理長任命された私は、慌ててその役目を辞退した。その後必死なお願いの結果、妥協案として献立は全て私が立てる事で一応話はまとまったのは奇跡といえよう。しかしそこからがまた大変だった。

今まで海賊のご飯なんて作った事がない私は、ビタミンを多くとする為のメニューは思い浮かんでもどう組み合わせればいいか分からなかったのだ。今までどんなものを食べていたかを聞きながら必死に献立をたて、その後ライに間に入ってもらい調理長達に作ってもらうという作業が続いた。

初めは私が混ぜモノである事と5歳児であることから意思疎通はなかなか上手くいかなくて、泣きたくなくなった。命の危険と隣り合わせな状態で頑張り、1週間後ぐらいから病状の改善が見られた時はホッとして泣きそうになった。そして海賊たちになんとか認めてもらえた時は正直泣くと思った。結局一度も泣いてないけど、涙腺が緩むぎりぎり状態になるぐらい私は必死だった。その後先生と呼ばれるようになり、今では献立の相談にも気軽に乘ってもらえる。本気でありがたい。

「仲間の病気が治ったら、出ていくって約束だもんな」

「先生。ここに残ればいいじゃないっすか」

いや、それはない。

涙もろい料理長が鼻をすすっているが、実際はそんなに感動できる場面ではない。なんといってもここは海賊の根城。根っから悪い人たちではないとは分かったが、元々私は人攫いにあつた被害者なのだ。仲間になる選択肢は絶対ない。それに犯罪者になるのは最後の手段。できるなら、捕まってバッドエンドコースなんて危険は冒さず、清く正しく生きたい。

「オクト、飯できたか？」

「完成したところ」

サラダにベーコンをまぶしたところで、ライが厨房に入ってきた。

「お、旨い」

「食うな」

「味見だつて」

何が味見だ。ライ達海賊の味見の量が半端ない事は、すでに知っている。こいつらの味見は味見の域を超えているのだ。そもそも何故鶏肉を食べる。そこはソースを舐めるべきだろ。

「運べ。大盛りにするから」

それでもそこを咎めても話が進まないの、初めから他の餌で釣る方がいいと2週間で私は学んだ。

料理当番達とライに手伝って貰い料理を運ぶ。

「朝ご飯持ってきたぞ」

「待つてましたっ!」

ドアの向こうにはポーカーで遊んでいる海賊たちがいた。威勢のいい声が飛び、ヒューっと口笛まで聞こえる。これだけで、すでに病人ではないだろと思う。最近は何人も普段の仕事に混じっているわけだし完治したといつてもいい。

私はスープをよそいながら、いい加減ネロに会わないとな考える。すでに2週間もたってしまったのだ。私を含め、捕まった女性達も限界に近いだろう。

最近見に行っていないけど――あれ？

「……色々不味くない？」

「えっ、味が？」

ぼつりとつぶやいた言葉に、パンを配っていたライが反応する。

私はなんでもないと首を横に振った。

私は船長と取引して以来、ライと同じ部屋で寝起きしている。なので体的に問題はないのだが、あの牢屋に取り残された人たちは、

今もベットもトイレもないあそこに閉じ込められているのだ。あんな場所じゃ、発狂している可能性がある。

「ネロに会わないと」

もう一つの条件である、航海中にどうしたらいいのかを早く教えて、女性達を開放しなければ。病状は改善したのだから、もう信じてもらえるはずだ。少なくとも船長以外の海賊は、壊血病に関しては私を信頼してくれていると思う。彼らを味方につければ、何とかなるはずだ。

「船長かあ。今日客が来るらしいけど、それまでは本でも読んでるんじゃないか？」

海賊つてそんなに暇でいいものか。

もっと仕事しろと思ったが、すぐに私はそれを否定した。彼らの仕事＝犯罪。うん、仕事せずにだらだらしてて下さい。むしろ一生働くな。

「ライ、よろしく」

私は一人でウロウロする事を認められたわけではない。料理中は調理長や、料理当番がいるのでライから離れるが、それ以外はほぼ一緒だ。ある意味私もよく発狂しないなと自分で感心してしまう。

まあライは怖いけど、問答無用で怖い事をするわけではないから安心していられるのかもしれない。人に観察されるのは嫌いだけど、慣れてはいる。

「じゃあ、船長の飯を持っていくついででいいか？」

別に飯のついでだろうと何だろうと問題はない。早いに越した事はないと思うので、頷く。

一通り配り終わったところで私たちは料理を持って、船長がいる部屋に向かった。

「そういえば、NO・2って誰？」

ふと私は、NO・2やライが倒したというNO・3に会った事がない事に気がついた。会いたいわけではないが、どんな人なのだろう

う。

「えーっと、副船長達は外回りの仕事だったはず」

どうしてだろう。彼らがいう仕事は、不穏なものしか感じられない。……まあ海賊だからなんだろうけど。それにしても外回りって、何だか営業みたいだ。

「海賊の仕事って色々なんだ」

「そ、色々だな。船の修繕が終わったら、また航海に行くけど、それだけじゃないって事だな。海賊とその家族だけが住んでる島もあるんだぞ」

絶対近づかない方がいい場所ですね、分かります。

島がどれほどの大きさは分からないが、それはすでに国家じゃないだろうか。私は周囲にどう思われようと、できる限り家に引きこもるべきだと悟った。彼らと二度と関わりたくない。

「船長、飯持ってきました」

ライは相変わらず中の返事を待たずに部屋に入った。敬う気があるのかないのかよく分からない。それでも船長が咎める事はないので、私としてはどちらでも良いんだけど。

「メニューは何だ」

ライがちらりと私を見た。どうやら私が説明しろということらしい。一応私が立てた献立だし、仕方がない。

「鶏肉のオレンジソース煮、カリカリベーコンサラダ、じゃが芋のスープ、キウイフルーツとパン」

私が喋ると、船長はようやくこちらを振り向いた。私がいると思わなかったようだ。少し目を見開いた後、にやりと笑う。嫌な笑みだ。私が必要最低限しか近寄らないようにしていた事を船長も分かっているのだろう。

「先生が直々に持ってきて下さったのか」

「……先生とか止める」

「どうしてだ？皆言っているのだから？」

ネロがいうと、嫌味っぱいんだよ。

心の中でののしるが、口には出さない。ビビりと罵られようと、私は私の命の方が大切だ。

「それもできたら止めて欲しい。私は先生ではない」

「ふーん。それにしても来いと言っても、忙しいやらなんやらと言つて来ないくせに、今日はどういう風の吹きまわしだ？」

そんなの精神的に苛められる事が分かっていて、素直に近づくほど私はMではないからだ。避けて通れる危険はできるだけ避けるに決まっている。

「献立を立てることに慣れていなかったの。時間が取れず、申し訳ない事をした。今日来たのは、船員の病状が改善した事の報告と、航海中の病気予防方法を聞いてもらうため」

「まだ完治したわけじゃないだろ？」

「ほぼ完治した。それは他の船員も納得してくれている。もう普通どりの食生活で問題ない。だからそろそろ女性達を開放する為の取引がしたい」

私を引き止めてもネロにとっていい事なんてないはずなので、これはただ嫌がらせだ。このドSな生き物は、きつと損得抜きで嫌がらせをする事に生きがいを感じているに違いない。マジ関わりたくない人種だ。

「そうか。言つてなかったな」

ぽんとネロはわざとらしく手を打ち鳴らした。ネロの笑顔を見ると嫌な予感しかしないのは何故だろう。何をされたわけでもないのに、顔が引きつりそうになる。

「女性はもう解放したぞ？」

「は？」

突然の言葉に私は理解が追いつかず、ぽかんと口を開けたまま固まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6788x/>

ものぐさな賢者 幼少編

2011年11月9日20時58分発行